

Title	C.de Bridia による Hystoria Tartarorum 訳・注 (2)
Author(s)	海老澤, 哲雄; 宇野, 伸浩
Citation	内陸アジア言語の研究. 11 p.67-p.120
Issue Date	1996-07
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/20082
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

C. de Bridia による *Hystoria Tartarorum* 訳・注 (2)

海老澤 哲雄
宇野 伸浩

本稿は、本誌『内陸アジア言語の研究』10, 1995, pp.13-65に掲載された前稿(*Hystoria Tartarorum* 1節~27節の訳・注)の続編であり、本稿では28節から最後の62節までを扱う。従って、脚注の文献は、新出の文献を除き、前稿の pp. 60-65 に掲げた文献目録によることとする。

28 くさらに、タルタル人は、シレジア^(a)に進むと、当時その地方で最も敬虔なキリスト教徒であったヘンリク公と会戦した。タルタル人自身が、ベネディクトゥス修道士に語ったところでは、かれらが逃げ出そうとすると、突然思いがけなくもキリスト教徒軍の戦闘隊形が敗走に転じた。そのときタルタル人は、ヘンリク公を捕らえて身ぐるみ剥いだ上、サンドミールで殺されたかれらの指揮官の亡骸の前に跪くように命じた。それからヘンリク公の首だけを、羊の頭も同然に、モラヴィア^(b)を経てハンガリーのバティのもとへ送り届け、そのあと首は他の死体の首の中に投げ捨てられたのである^(c)。

◇カルピニに対応箇所なし

(a) シレジア Zlesia 現在のポーランド南端のシレジア地方。この節で述べられている戦闘は、シレジア地方のリーグニッツ Liegnitz (ポーランド語ではレグニツァ) 近くで、1241年4月にポーランド軍・テュートン騎士団の連合軍がモンゴル軍と会戦して惨敗した有名な戦い。この節の記述は、この有名な戦いについて、他の史料に見られない貴重な情報を提供しているとペインター

氏が指摘している。⁽¹⁾

(b) ヘンリク公 Henricus ピアスト家出身のヘンリク 1 世の息子ヘンリク Henryk 2 世。ポーランド大公の父ヘンリク 1 世 (在位1234-1238年) の存命中にシレジア公となり、父の死後、父のポーランド大公位も継承した (在位1238-1241年)。「敬虔王」と呼ばれた。

(c) 「突然思いがけなくもキリスト教徒軍の戦闘隊形が敗走に転じた」 ドーソン氏によれば、ポーランドとシレジアの歴史家が次のように伝えているといい、この節の記述と一致する。「スリスラフとミェズィスラフの2部隊がドイツ十字軍士の救援に急いで駆けつけ、タルタル族の攻撃に対抗して勇敢に応戦していたとき、1人の無名の騎士の声がポーランド軍の側面を駆け回って、「逃げよ、逃げよ」と言うのを聞いた。ミェズィスラフとその軍隊はこれ⁽²⁾が有益な忠告だと思って、突然退却した。」

(d) モラヴィア Moravia 現在のチェコ共和国東部のモラバ河流域。ポーランドからハンガリーに抜けるルートになっている。

29 くまた、バティ自身がハンガリーに半ば以上深く侵入したとき、同母異父兄弟の2王、すなわち、今王位にあるベーラ^(a)と故コロマン^(b)が、大軍勢を率い、ある河の近くでバティを攻撃した。最初の会戦で、コロマンは自分の手で、その河の橋からタルタル人の有力な一武将を馬・武器もろとも死の淵に突き落とした。このようにして、コロマンが、タルタル人を2度3度迎え撃つと、ついにかれらは敗走に転じた。一方バティは、そうしているうちに、一隊を渡河させて一兩日行程の上流部へ差し向け、本隊が橋の上で戦っているときに、こっそりと逆方向から敵を襲撃させようとした。作戦は実行された。それは驚くほど図に当たった。すなわち、ハンガリー人がコロマン王の警告を軽んじたので、タルタル人は橋を渡ってしまったのである。実はタルタル人自身が言って

(1) Painter 1965, p.47.

(2) ドーソン 1968, p.168.

いることだが、かれら自身すでにハンガリー人の前から逃げ出そうとしていて、バティは剣を抜いて戦いに戻るように強いていた。くけれども、ハンガリー人たちは、タルタル人を甘く見てほとんど攻撃の手を休めていたのである。ポーランド人が嫉妬によって過ちを犯したように、ハンガリー人は厚顔無恥の思い上がりによって過ちを犯したのであった。ついにタルタル人は進撃して多数の者を倒し、海に至るまでハンガリー王ベーラを追跡した。

◇カルピニ V 章 28 節

(a) ベーラ Bela ハンガリー王ベーラ 4 世 Béla IV (在位 1235-1270 年)。ベーラ 4 世は、モンゴル軍に負けて逃れてきたクマン(コマン)人をハンガリー国内に軍事力として導入し、大貴族勢力に対抗しようとした。しかし、クマン人は近隣農民と衝突するなど問題を起こし、結局は国外に去った。ベーラ 4 世は、モンゴル軍の来襲を知ったとき、クマン人をモンゴル軍に対抗させることを考えていたがそれもできなくなり、大貴族の協力も得られなかった。⁽³⁾

(b) コロマン Colomanus ベーラ 4 世の弟コロマン公 Coloman.

(c) 「ある河の近くでバティを攻撃した」 1241 年 4 月、ベーラ 4 世は、ティサ河の支流シャヨー Sajó 河畔のムヒ Mohi でモンゴル軍と対戦したが、負けて背走した。この戦いについての根本史料は、『集史』、『世界征服者の歴史』、『元史』巻 121 速不台伝、『悲嘆の歌』、カルピニ『モンゴル報告』V 章 28 節、および本節のブリディア 29 節であるが、モンゴル側の作戦を最も的確に記録しているのは、本節と以下にあげる『元史』速不台伝である。カルピニの V 章 28 節は、本節と重なる部分もあるが、モンゴル側が苦戦したことだけを述べて、ハンガリー側がどのようにして敗けたかについては省かれている。『元史』速不台伝については、ブレットシュナイダー氏による英訳があり、岩村⁽⁴⁾

(3) パムレーニ 1980, p.87.

(4) Bretschneider 1888, I, pp.330-332.

(5)
氏による専論もあるが、まだ、本節と速不台伝の内容を比較して分析されたことはない。そこで次に速不台伝の対応する箇所をあげ、本節と比較検討したい。「哈咂里山を経て、馬札兒部の主、怯憐を攻む。速不台先鋒となり、諸王拔都、^{マジャール}吁里兀、^{キウーリ}昔班、^{スベエタイ}哈丹と五道に分かれて進む。衆曰く「怯憐の軍勢盛んなり、未だ輕々しく進むべからず」と。速不台、計を出して其の軍を誘い、^{フアリョー}渾寧河に至る。諸王上流に軍す。水淺くして馬渉るべし。中に復た橋あり。下流は水深し。速不台、棧を結び、潜かに繞って敵の後にしんとして未だ渡らず。諸王、先ず河を涉って敵と戦う。拔都の軍、橋を争い、反って敵の乗ずるところとなり、甲士三十人を没し、并せて其の麾下の將^{バガトル}八哈秃を亡う。既にして渡る。諸王は敵尚お衆きを以て、速不台の還るを要めんと欲し、徐に之を圖る。速不台曰く「王歸らんと欲せば自ら歸れ、我は^{ドナウ}秃納、^{マジャール}馬茶城に至らずんば、還らざるなり」と。乃ち馳せて馬茶城に至る。諸王また至り、遂に攻めて之を抜き、而して還る。諸王來會す。拔都曰く「渾寧河に戦いし時、速不台の救うこと遅く、我が八哈秃を殺せり」と。速不台曰く「諸王惟だ上流の水淺く、且つ橋有るのみを知り、遂に渡りて與に戦うも、我、下流に於いて、棧を結び未だ成らざるを知らず。今但だ我が遅れしを言うのみなり。当に其の故を思ふべし」と。是に於いて拔都も亦た悟れり。後に大いに會し、飲むに馬乳酒及び葡萄酒を以てす。怯憐を征せし時の事を言いて曰く「当時の獲る所は皆速不台の功なり」と。」(『元史』卷121、速不台伝)

「怯憐」は、ハンガリー語で「王」を意味する király にあたり、従ってハンガリー王ベーラ4世を指す。「渾寧河」の「渾寧」は、岩村氏によると、ハンガリー語で「河」を意味する folyó にあたり、固有名詞ではないという。この文脈ではシャヨー河を指す。⁽⁶⁾

(5) 岩村 1941a；岩村 1941b, pp.100–101.

(6) 上記の史料の語釈については、Bretschneider 1888, I, pp.330–332；Pelliot 1950, pp.131–133；岩村 1941a, pp.109–117 を参照。「怯憐」については、本訳・注34節注(e)「コロラ」の項を参照。

この速不台伝の記事と本節を比較してみると、まず本節は、最初の戦いでは、ハンガリー側が優勢でモンゴル側の武将が戦死したこと、しかし、その後上流部を渡河したモンゴル軍の一隊がハンガリー軍の背後を突きモンゴル側が優勢に転じたことを伝えている。それに対して、速不台伝は、大筋では前半にハンガリー側が優勢でモンゴル側の武将が戦死し、後半にモンゴル側が優勢に転じたという同様の内容であるが、細部においては、前半にバトゥら諸王がふた手に分かれ、橋と浅い上流部を渡って攻めている点、後半にスベエテイの一隊が深い下流部を渡って遅れて戦いに参加している点が異なり、本節とは相異なる事実を伝えている。

30 ところで、ハンガリーにいたバティは、オコダイ・カン——姉妹によって毒殺されて富める者とともに地獄に葬られた——が死んだことを知ると、すぐにコマニアに戻った。修道士たちは、タルタル人のところから教皇のもとへ戻るときに同地でバティに会った。さらに修道士たちの話によると、バティはすでに自分の領地からクユク・カンのところへ向かっているという^(b)。その上、2人の間には大きな不和が生じており、これがさらに高じると、キリスト教徒は、長いことタルタル人から脅かされずにすむだろう。

◇カルピニに対応箇所なし

(a)「オコダイ・カン——姉妹によって毒殺され」 オゴデイの毒殺説については、カルピニも「皇帝(=グユク)の母は一方へ行き、皇帝は裁判を行うために別の方へ行った。というのは、その皇帝の叔母が逮捕されたからである。かの女は、かれらの軍隊がハンガリーにいたときに、かれ(グユク)の父を毒殺によって殺した。そのために、上述の地方にいた軍隊は撤退した。かの女と他の多くの者に判決が下され、処刑された。」(IX章36節)と記し、グユクの父すなわちオゴデイが、グユクの叔母すなわちオゴデイの姉妹によって殺されたことを伝えている。なお、カルピニのVIII章5節にも短い言及がある。

(b)「クユク・カンのところへ向かっているという」本節の記述によると、ベネディクトゥスやカルピニが、帰路にバティすなわちバトゥに出会ったとき、バトゥはまだコマニアすなわちキブチャク草原にいた。しかし、バトゥが自分の領地からグユクの方へ向かったことをベネディクトゥスらが知っていたことからすると、かれらがバトゥと再会した前後に、バトゥは東方へ出発したらしい。かれらがバトゥと再会したのは、カルピニによると1247年5月9日である。⁽⁷⁾従って、1247年5月ころにバトゥは東方へ出発したことになる。ところが、『集史』には「かれら(トレゲネ・ハトンら)は、かれ(グユク)を即位させるために再びバトゥを招喚した。かれ(バトゥ)はかれらに腹を立てていたけれども、以前の軍隊の恐怖の事件を恐れて出発し、ゆっくり進んだ。かれらは、かれ(バトゥ)が到着しハン一族が出席する前に、身内の独裁によって、カーンの位をグユク・ハンに定めた。」⁽⁸⁾とあり、バトゥはグユクの即位(1246年8月24日)より前に出発したが、ゆっくり移動したため、グユク側は到着を待たずに即位式を行ったという書き方をしている。このような表現になったのは、『集史』にバトゥの東進は即位式に出席するためであったという口実を盛り込むためであったらしい。実際には、バトゥは、グユクの即位を知ってから、東方へ出発したのである。出発後のことについては、『世界征服者の歴史』に「グユク・ハンがハンに即位したとき、バトゥはかれの依頼と提案によって出発したが、アラ・カマクに達したときグユク・ハンの死去が知らされ、そこに留まった。」⁽⁹⁾「バトゥは、自分のオールドから、サクシンとブルガルの地方から、当初の目的に従ってグユク・ハンのもとへ出発したが、カヤリクの町まで7日行程であるアラ・カマクという場所に到着したとき、グユク・ハン死去の状況についての情報を聞き、そこに留まった。」⁽¹⁰⁾とあるように、バトゥは1年ぐらいかかって東へ進み、中央アジアの

(7) 護 1965, pp.87, 115, 注91.

(8) Rashid / TS 1518, fol.165a.

(9) Qazvini 1912, I, p.223.

(10) Qazvini 1912, III, p.15-16.

アラ・カマクでグユクの死去(1248年4月)を知ることになる。このときの政治状況については、杉山正明氏による的確な分析があり、以下に要約しておきたい。即位後わずかに1年9ヶ月のグユクは、エミル河畔の私領にもどると称して西へ進軍した。一方、バトゥも大軍を率いてヴォルガ河畔を出発し、天山北麓のアラ・カマクという夏営地まで進み、両者がかなり接近することになるが、そこでバトゥはグユクが突然他界しという訃報に接した。このグユクの突然の死去は、実はバトゥが刺客を放ってグユクを暗殺したのだ⁽¹¹⁾と考える岑仲勉説があり、状況的にはバトゥに被疑者の資格が十分にある。

本節の最後の文章は、グユク、バトゥの両方に会ったベネディクトゥスが、2人の関係が悪化していることを知り、将来の展開を予想した興味深い記事である。『集史』や『世界征服者の歴史』がこの時期の両者の関係についてややあいまいな書き方をしているので、本節の明解な記述は貴重である。

31 また、南に向かったギルボダン^(a)が指揮している第2軍は、キルギス^(b)と呼ばれている地方を従えた。この地方の人々は、異教徒であり、あごひげがない。各人の父親が死ぬと、自分の一方の耳から他方の耳にかけてあごの皮を帯状に切り取り、父親の死に哀悼の意を表す。第2軍は、同じくアルメニア、グルジア、^(c)ヌビア^(d)、^(e)トゥルキア、バグダード、サラセン人のスルタンドも、その他多くのものを従えた。今なおかれらは^(f)ダマスカスのスルタンと戦っているといわれている。

◇カルピニV章32・33・34節

(a) ギルボダン Gyrpodan 本訳・注(1)23節注(P)(前号 p.55)の Cyrbodan と同一人物であり、スニト族出身のチオルマカン Čormaqaŋ (ペルシア語史料ではチオルマゲン Chūrmāghūn) のことである。チオルマカンの率いるタマチ軍

(11) 杉山 1992, pp.137-138.

は、ホラズム・シャー国のジャラル・ウッディーンを追討するために派遣され、1230-31年にかけての冬に、ジャラル・ウッディーンのいたアゼルバイジャンに侵入した。ジャラル・ウッディーンは逃亡したが、1231年8月にクルド人の手にかかって殺された。モンゴル軍は、アゼルバイジャンの牧地を拠点として、バグダード、アルメニア、グルジア等を侵略した後、1242年には小アジアの辺境の要衝エルズルムに進攻した。それ時までにチョルマカン⁽¹²⁾は半身不随となり、軍の指揮権は、ベスト族出身のバイジュ・ノヤンに移っていた。以後バイジュ・ノヤンがタマチ軍を率いて戦い、1243年にはキョセ・ダグでスルタン・カイホスロウ2世の率いるルーム・セルジューク軍を破った。

- (b) キルギス Kirgiz カルピニには Kergis とあり、両者とも、文字面だけを考えれば、イェニセイ河上流に居住していたトルコ系の遊牧民 Kirghiz のことである。また、ここに記されている習慣は、内陸アジアに広く行われており、死者に哀悼の意を表するための傷身行為⁽¹³⁾である。ところで、この節に述べられているような、チョルマカンの率いるモンゴル軍が、イェニセイ河上流のキルギスを征服したという事実は、他の史料には見られず、史実と考えることはできない。また、カルピニに「南方へキルギス Kergis に対して派遣し」とあるのもおかしい。そのため、カルピニのこの部分の解釈としては、ルブルク『旅行記』にイェニセイ河の Kirghiz とカフカーズ山脈の Cherkes を混同して両者とも Kerkis と表記する例があることを考慮して、カルピニの Kergis もカフカーズ山脈北西のチェルケスの誤りであるとみなすことが多⁽¹⁴⁾い。しかし、これは単なる綴りの誤りの問題ではなく、チョルマカンの遠征について、敢えて史実に反することを書いたと取るべきであろう。なぜな

(12) ドーソン 1973, pp.51-86; 井谷 1989, pp.125-127, 131-134; 井谷 1980, pp.360-362.

(13) 江上 1948; 谷 1984.

(14) Risch 1930, pp.130-31, 154-55; 江上 1948, p.10; 護 1965, pp.98-99, 注40; Pelliot 1963, pp.620-621. ただし、最近メネストはこの解釈に反対している (Menestò 1989, pp.439-441, no.24, 457-458, n.58.).

ら、チオルマカンは、ホラズム・シャー国のジャラル・ウッディーンを討伐するために派遣されたのであるが、カルピニは、⁽¹⁵⁾「同じ時に、オコダイ・カンは軍隊とともにキルボダン(チオルマカン)を南方へキルギス Kergis に対して派遣し、かれはかれらを戦鬪で征服した」(V章32節)と述べ、事実と全く異なるチオルマカン派遣の目的を記しているからである。この点は、たとえ Kergis を Cherkes の誤りと解釈しても解決できない。むしろこれは、カルピニやブリディアでは、一貫してホラズム・シャー国征服の事実が、大きく削られていることと関係があるとみるべきであろう。本訳・注(1)22節注(a)(前号 p.52)で述べたように、チンギス・ハンのホラズム遠征の記事は、アレクサンダー・ロマンスに由来する伝説に置き換えられてしまい、全く削られている。ここでも、チオルマカンのジャラル・ウッディーン討伐という史実が意図的に削られ、代わりにキルギスが持ってこられたため、史実に反する奇妙な内容になってしまった可能性が高い。

- (c) ヌビア Nubia ベインター氏によれば、このヌビアは、アフリカのヌビアを指すのではなく、インド洋・ペルシア湾・インダス河の地方を指すという。なお、ブリディアには、本節と34節にヌビア Nubia が出てくるが、カルピニ⁽¹⁶⁾の対応する箇所には、ヌビアは出てこない。
- (d) トウルキア Turchia これに対応するカルピニの記事には、「それから、非常に強大で勢力のあるルームのスルタンの土地へ進軍し、かれと戦って征服した」とあるので、Turchia は小アジアのルーム・セルジュークを指すと考えられる。ルブルクの『旅行記』でも、Turchia / Turkia をその意味で使用している。ただし、ベネディクトゥスの *Relatio Fr. Benedicti Poloni* 8節では、⁽¹⁷⁾“Turkya”を西トルキスタンの意味で使っており、また、モンゴルが征服した地方を列挙した本書の34節では、ルーム・セルジュークを意味する Vroomsoldan とは

(15) ドーソン 1973, p.51; 本田 1967 (本田 1991, p.105); 本田 1969 (本田 1991, p.201)。

(16) Painter 1965, p.84, para.31, no.3

(17) Wyngaert 1929, p.138.

別に Turkia が出てくる。従って, “Turchia / Turkia / Turkyia” の用法にやや混乱があるらしい。⁽¹⁸⁾

- (e) 「ギルボダンが指揮している第2軍は. . . その他多くのものを従えた」
チオルマカンの率いるモンゴル軍が従えた地域として, 本節後半にあげられている名称は、『世界征服者の歴史』にあげられた, 西アジアからグユクの即位に参列したメンバーと比べると, ヌビアを除けばよく対応する。まず, 『世界征服者の歴史』によれば, ルーム・セルジュークからスルタン Rukn al-Dīn, キリキア・アルメニア王国から国王 Hethum I 世の兄 Smbat, グルジア王国から David IV 世とそのいとこの David V 世, アレッポから領主 (ṣāhib) al-Nāṣir Ṣalāḥ al-Dīn Yūsuf の兄弟, モスルからスルタン Badr al-Dīn Lū'lū の使者, バグダードからカーディーの長官 Fakhr al-Dīn, アラムートの 'Alā al-Dīn の使者 Shihāb al-Dīn と Shams al-Dīn が参列したという。⁽¹⁹⁾ 従って, 「アルメニア」が Smbat のキリキア・アルメニア王国, 「グルジア」が David IV 世らのグルジア王国, 「トゥルキア」がスルタン Rukn al-Dīn のルーム・セルジューク, 「バグダード」がカーディーの長官 Fakhr al-Dīn を派遣したバグダード, 「サラセン人のスルタンども」がスルタン Badr al-Dīn Lū'lū のモスルにそれぞれ対応する。

- (f) ダマスクスのスルタン soldanus Damasci 本節に対応するカルピニの記述をみると, 写本間に異同があり, 「アレッポのスルタンの土地まで usque ad terram Soldani Alapie」とある写本と「ダマスクスのスルタンの土地まで usque ad terram Soldani Damasci」とある写本がある。Wyngaert は前者を採用したが, 近年出版された Menestò の校訂テキストは, 本節に「ダマスクスのスルタン」とあることを考慮して, 後者を採用している。しかし, その注にも指摘されているように, 1246-47年の時点で, モンゴル軍がダマスクスやアレッポと戦っていたという事実はない。⁽²⁰⁾ ドーソン氏は, この時期, モンゴル

(18) Jackson 1990, p.61, n.3.

(19) Qazvini, I, p.205; Boyle 1958, I, p.250.

(20) Menestò 1989, p.460, n.64.

軍がシリアに侵入し、ダマスカスとアレppoがモンゴルに服属したように書いている。⁽²¹⁾しかし、ハンフリーズ氏、佐藤次高氏によれば、当時シリアを荒し回っていた騎馬兵は、モンゴル軍でなく、ホラズム・シャー朝の残党であるフワーリズミーヤであった。かれらが1240年秋頃からシリア北部に侵入し始めると、アイユーブ朝のスルタン、al-Ṣāliḥ Ayyūb は、かれらをクルド人集団とともにアイユーブ朝軍に合流させて軍を増強し、1245年にダマスカスを直接支配下に入れることに成功した。ところが、翌1246年、ダマスカス周辺に遊牧していたフワーリズミーヤは、3月に反乱を起こし、ダマスカスを包囲した。しかし、アレppoとホムスからの援軍により、フワーリズミーヤ軍は敗退し、かれらの首領 Berke Khan は殺されたという。⁽²²⁾

32 くまた、第3軍は、タルタル人の支配に^(a)いまだ完全に服していない、ある東方の勢力と戦っている。

◇カルピニに対応箇所なし

(a)「ある東方の勢力と戦っている」 対南宋戦のことを指すと考えられている。⁽²³⁾

オゴデイは、1236年に第3子クチュを総司令官として南宋遠征を開始したが、クチュは同年11月、中央軍を率いて漢水流域を南下していた途中で急死した。以後、対南宋戦は敗退を続け、1240年以後は膠着状態に陥っていた。⁽²⁴⁾

33 くオコダイ・カンが死んでから、タルタル人には7年間カンがいなかった^(a)ので、西方の地にもたえて進撃しなかった。ところが、われらの修道士たちが居合わせたときかれの息子クユクがく1票差の多数決で^(b)カンに選ばれた。かれは、選ばれるとすぐに、神の教会とキリスト教徒の領域とあらゆる西方の

(21) ドーソン 1973, pp.88-89, 92-93.

(22) Humphreys 1977, pp.269-278, 284-287; 佐藤 1986, pp.104-105, 190.

(23) Painter 1965, pp.84-85.

(24) 杉山 1992, pp.168-169.

国々に対して勝利の旗を掲げた。そしてその戦闘のために、かれの全軍隊の中から3分の1を選定した。かれらは18年間ずっと戦おうとしてやってくるだろう。〈有力者も皇帝も国王も恐れない者は評価されない〉。かれらは、そのうちにキリスト教徒に殺されることを知っているけれども、〈報復の神が報復されるはずのない者の血を思いがけなく罰するという、神が定めた時も場所も知らないのである〉。

◇カルピニV章19節, VIII章2・4

- (a)「7年間カンがいなかったので」 オゴデイが死去したのは、『元史』巻2太宗本紀、『世界征服者の歴史』によれば、1241年12月11日であり、グユクが即位したのは、カルピニ(IX章33節)によれば、1246年8月24日であるので、空位期間は、4年8カ月半弱であり、この節の「7年間」は正しくない。⁽²⁵⁾
- (b)「クユクが1票差の多数決でカンに選ばれた」『世界征服者の歴史』、『集史』⁽²⁷⁾によれば、チンギス・ハンは、オゴデイの後継者として、オゴデイの第2子コデンを指名した。また、オゴデイは自分の後継者として、第3子クチュを指名したが、クチュが南宋遠征中に死去すると、クチュの息子のシレムンを後継者に指名していた。オゴデイの第一夫人トレゲネは、これらを見捨てて長子グユクを後継者に推した。従って、この3人でハン位が争われ、トルイの寡婦ソルカクタニ・ベキとかの女の息子たちおよびノヤンたちがトレゲネに味方し、結局グユクが即位することに決定した。「1票差の多数決で」の原文は、“per vnus arbitrium”であり、ペインター氏が“by a majority of one”と訳しており、一応それに従うが再考の余地がある。ただ、カルピニはこのような決定の詳細は記しておらず、単に、クリルタイの開催された場所に4週間あまり滞在して、そこで選任が行われたと記しているのみである

(25) Painter 1965, p.85.

(26) Qazvini 1912, I, p.206; Boyle 1958, I, p.251.

(27) Boyle 1971, p.181.

(IX章32節). それに対して、ベネディクトゥスは、クリルタイが開催された3日目に意見が一致し選任を行ったとはっきり記しており(11節), より詳しい情報を知っていたらしい。

- (c)「かれの全軍隊の中から3分の1を選定した」これに対応するカルビニのVIII章4節は、以下に挙げるようになりかなり具体的な異なる表現を取っているが、内容は同じことを述べている。「前述の宮廷で、軍隊の戦士とリーダーが指名された。かれらの支配する全地域から、10人毎に3人をかれらの従者ととともに送るのである。」つまり、千戸制に編成された遊牧民の各十戸から3人を選抜してかれらの従者ととともに送らせ、遠征軍を編成することを述べており、十戸とは10人の戦士を出すことができる集団であるので、結局、この節に記されているように全軍隊の中から3分の1が選抜されたことになる。
- (d)「有力者も皇帝も国王も恐れない者は評価されない」この部分は写本に欠落があり、ペインター氏とオネルフォルス氏とでは、異なる単語を補っている。ペインター氏は、“nec apertantur qui nec potentem nec imperatorem neque reges <relinquant>,”と2語目を apertantur (解かれる, 道が開かれる)と読み, relinquant (滅ぼす)を補い, 「支配者も皇帝も王も滅びないうちは出発しない」と訳した。⁽²⁸⁾ 一方, オネルフォルス氏は “nec apertantur, qui nec potentem nec imperatorem neque reges <reuerentur>,”と2語目を apertantur (評価される)と読み, reuerentur (恐れる, 畏敬する)を補っている。⁽²⁹⁾ 一応, より新しい校訂テキストであるオネルフォルス氏に従って訳したが, 氏がどのような意味にとって語を補ったのか, 今一つよくわからない。
- (e)「そのうちにキリスト教徒に殺されることを知っているけれども」これに対応するカルビニV章19節には, 「かれらに予言されていることによれば, 何であるか分からないが他のある種族によってかれらは征服されるはずである

(28) Painter 1965, pp.84-85.

(29) Önnersfors 1967, p.22.

といわれている」とあり、モンゴルを滅ぼすのが誰であるかは分からないことになっている点がこの節と異なる。また、カルピニV章28節によれば、かれらが滅びるという予言をしたのはチングス・ハンだという。⁽³⁰⁾

34 タルタル人が従えた地方の名前は、以下の通りである。キタイ、ソロンガ、エチオピア、オイラト、ケレイト人、ブリテベツト、ウイグル、キルギス、サリウイグル、メルキト、メクリト、ナイマン、カラキタイ、トゥルキア、^(a)〈ヌビア〉、バグダード、^(a)〈ウルムスルタン〉、^(b)ピセルミン人、^(c)カンギト人、^(d)アルメニア、^(d)グルジア、^(e)アスと称するアラン人、^(f)キルカス人、^(g)ガザル人、^(h)クスカルと称するコマン人、^(e)モルダヴィア、^(f)バシキルすなわち大フンガリア、^(g)ビレル人、^(e)コロラ、^(f)〈カシディ〉、^(f)パロシト人、^(g)〈カニナ〉、^(g)ザモゲド人、^(h)ネストリウス教徒、^(h)〈ヌシア〉、^(h)ベルシア人のスルタンたち（そのすべてはサラセン人と自称している）。

◇カルピニVII章9節

- (a) ウルムスルタン *Vrumsoldan* カルピニのV章35節の“terra Soldani de Urum（ウルムのスルタンの土地）”の“Soldan de Urum”に当たり、小アジア Rüm のルーム・セルジューク朝のスルタンのこと。トルコ語で「ルーム Rum」を「ウルム Urum」ともいう。⁽³¹⁾
- (b) 「アスと称するアラン人」 本訳・注(1)24節注(g)「アラン人」の項(前号 p.57)を参照。
- (c) キルカス人 *Circasi* カフカーズ山脈の北西部に居住するチェルケス人 *Cherkes* のこと。⁽³²⁾

(30) 護 1965, p.100, 注47; Menestò 1989, p.442, n.30.

(31) Sofi Huri et al. 1968, p.1201.

(32) Risch 1930, p.231, 269; Pelliot 1959, pp.606–608, no.199; Becquet & Hambis 1965, p.173, no.153.

- (d) クスカル Kusscar ペインター氏は、コマン人の別称である「キプチャク Kipchak」の壊れた形と見る。本訳・注(1)20節注(f)「クスブク人」の項を参照。
- (e) コロラ Corola これは、『元朝秘史』270節の「客⁽³³⁾列⁽³⁴⁾ kerel」, および『世界征服者の歴史』の“kelār”, 『集史』の“keler”, 『元史』巻121速不台伝の「怯憐」(本訳・注29節注(c))に当たり、ハンガリー語で「王」を意味する király,あるいはスラブ語で「王」を意味する kral', krol', korol' に由来すると考えられている。⁽³⁴⁾ これらの語は、ハンガリー王を指す場合が多いが、『集史』の用例は、Bāshghird や Mājār (ハンガリー人) などの王が“kerel”であるという表現になっている。
- (f) カシディ Cassidi メネスト氏によれば、カルピニVII章9節の Cassi は、この Cassidi にあたるという。ペインター氏は、Cassidi について、? を付しながらもイェニセイ河上流に居住していたケスディイム (客⁽³⁵⁾音 Kesdiyim 『元朝秘史』239節) に当たるのではないかとする。
- (g) カニナ Canina これは、本訳・注(1)21節(前号 pp.49, 51)の種族「ノホイテリム」のことであり、そのラテン語名“canina capita”の“canina”にあたる。⁽³⁶⁾
- (h) ヌシア Nusia ペインター氏によれば、このヌシア Nusia はおそらくロシア⁽³⁷⁾ Russia の誤りで、ルーシ諸国のロシアを指すという。

35 <以上のように、タルタル人の戦さとかれらがどこから現れたかについては述べたので、^(a) 次に、かれらの土地がどのようなところにあるかについて語らなければならない>。かれらの土地は、あるところはかなり山がちで、他のところは非常に平坦であることを知るべきである。土地が不毛であるのは、そこ

(33) Qazvini 1912, I, pp.157, 225; Али-заде 1980, p.127, 165.

(34) Bretschneider 1888, p.329, no.769, p.331, no.775; Pelliot 1950, p.115-162.

(35) Painter 1965, p.106; Menestò 1989, pp.468-469.

(36) Painter 1965, p.105.

(37) Painter 1965, p.105-106.

が砂地であり、気候が相当きびしいためである。これは、おそらく山地と平地から成っているからであろう。そこでは強風がいつも吹いているばかりでなく、季節はずれに稲妻が光り雷鳴が轟き嵐がおこる。〈かれらが修道士たちに語ったところによると、そこでは2、3年前から時季が驚くほど変わり始めたという。たしかにしばしば地上の近くであたかも雲と雲が戦っているように見えるのである。さらにかれらの話では、修道士がかれらのところに到達する少し前に、天から火がおち、何千という馬や小型家畜が、僅かな者を除くほとんどの牧人とともに死んでしまった〉。その上、修道士たちがカン、すなわち皇帝の選定に立ち会っていたとき、大量に雹が降り、急にそれが溶け出して160人以上の人が溺れ、持ち物が住まいごと遠くへ押し流されてしまった。〈ただその近くにあった修道士たちの住まいは全く無事であった〉^(c)。さらに、修道士たちも見ていて、ほかの人たちとともにこの天災に悩まされていると、烈風が吹き出しておびただしい砂塵を巻き起こしたので、だれひとり馬に乗ることも立つこともできなくなった。

◇カルピニ I 章 4・5 節

- (a)「以上のようにタルタル人の戦さとかれらがどこから現れたかについては述べたので」以上の1節から34節まで、このブリディアの記録の前半を占める部分は、内容的にほとんどカルピニのV章に対応している。それに対して、この35節以下後半の内容は、カルピニの方ではI章からVIII章までに散在している。ブリディアの節と、それに内容上対応するカルピニの章・節を対比すると、両者の関係はそれほど錯綜したものではなく、大体の傾向としては、ブリディアの35節以下のうち、はじめの部分ほど、カルピニでもはじめの方の章に、あとの部分ほど、カルピニでもあとの方の章に対応し、多少前後することはあっても、カルピニとほぼ同じ順序で記されていることがわかる。とはいえ前者が後者を全体的に縮約したものであるとはいえない。子細に見ると、カルピニのI章～V章の各節は、目次にあたる節を除けば、ほ

とんど全部ブリディアとの対応関係が認められる。それに対してVI章～VIII章の諸節にはブリディアと対応するものが少ない。対応しているのはVI章(全17節)の2・13・14節, VII章(全12節)の9・10節, VIII章(全15節)の12節にとどまる。おおまかにいえば, ブリディアは全体的にはカルピニのうち主として前半V章までに対応しているといえよう。それはいいかえれば, ブリディアには, タルタル人がいかに戦うか, いかに服属させるか, タルタル人にいかに対戦すべきかという軍事的問題についての記事が少ないことを意味する。それは, もともと報告者ベネディクトゥスがカルピニほどにこの方面に関しては詳細な資料を持ち合わせていなかったのか, それとも資料がありながらも, なんらかの事情から後半の部分をはしょってしまったのかのいずれかであろう。

- (b)「皇帝の選定に立ち会っていたとき」 31節注(e)に示したように, 『世界征服者の歴史』は, グユク・ハン即位のクリルタイの参列者として, ルーム・セルジューク, グルジア, アレッポ, モスル, バグダード等西アジア各地からの使節の名を伝えているが, そのほかに「フランクからの使節 (ilchyān-i Frang)⁽³⁸⁾」を挙げており, それがカルピニらを指すと推定されている。
- (c) 修道士たちの住まい カルピニのIX章29節によると, カルピニらがグユクのもとへ達したとき, グユクは, ハン位に即く前であったが, 一行に対して天幕 *tentorium* を支給させたという。ここにいう住まい *habitaculum* とは, その天幕のことであろう。

36 かれらタルタル人は, 一般的に小柄であり,^(a)く人をスリムにする牝馬の乳のためと労働のためにくかなり細い。しかし顔は幅ひろく, 頬がでっぱっており, さらにわれわれの聖職者のように頭頂部に剃髪があり,^(b)そこから左右の耳へ指3本分の幅で髪を剃りおとす習慣になっている。一方, 前頭部は, 髪の毛

(38) Boyle 1958, I, p.250; Qazvini 1912, I, p.205.

を半月形に梳いて眉まで垂らしている。そして残りの髪の毛は、くサラセン人のように^(c)束ねて編んでいる。

◇カルピニII章2節

(a)「小柄であり」 このくだりの原文は、“Isti Tartari sunt stature mediocris generaliter.....”である。カルピニも同じ内容を“pene omnes mediocris sunt stature.”(II章2節)と記している。この両者に見える“mediocris”については、カルピニを訳したリッシュ氏も、同じくドーソン本の訳者(スタンブルック大修道院の一修道女)も、同じくベケ、アンビスの両氏も、いずれも「中位の」⁽³⁹⁾と訳す。それに対してブリディアを訳したペインター氏と、カルピニを訳したルンガロッティ(M.C. Lungarotti)氏は「低い」⁽⁴⁰⁾ととり、ラッケウィルツ氏も後者の訳を評価している。⁽⁴¹⁾

(b)「頭頂部に剃髪があり」 頭頂部の剃髪についての本節の記述は、カルピニはいうまでもなく、ルブルクとも一致している。ルブルクは「男は頭頂部を四角に剃り、その前方の両隅からこめかみまで頭の両側をずっと剃り落とす。さらにこめかみを剃り、首筋もぼんくほの上まで、前の方も前頭部まで剃るが、その前の方には毛髪一房を残して眉辺まで垂らしている。頭の後ろの方には毛髪を残して房に編み、それを結んで両耳の辺に巻き付けている」と記している(VI章1節)。

(c)「束ねて編んでいる」 ルブルクは前掲(b)の末尾にあるように記しており、カルピニもそれと同じように「残りの髪の毛は、女性のように長くのばし、それを2本編みにしてそれぞれ耳の後ろに結んでいる」と記している。

(39) Risch 1930, p.54; Dawson 1955, p.6; Becquet & Hambis 1965, p.31.

(40) Painter 1965, p.86; Menestò 1989, p.340.

(41) Rachewiltz 1990, pp.424-425.

37 かれらの衣服について知っておくべきは、男が女と同じ形の衣服を着ており、そのためすぐには識別できないということである。〈このような衣服に関することは、役立つというより、ただもの珍しいだけと思われるので、^(a)かれらの衣服や飾りについては、これ以上書きとめようとは思わなかった〉。

◇カルピニII章4・5節

(a)「これ以上書きとめようとは思わなかった」 この書き振りから見ると、ベネディクトゥスもカルピニの記述と同じ内容のことを報告したと思われるが、記録をとったブリディアがあまり意義を認めずに省略してしまったのであろう。カルピニのモンゴル人の服飾に関する記述(II章4節)が、モンゴル人男女の衣服のほかには、顧姑あるいは *boqtaq*^(4 2) として知られる既婚の女性の頭飾り(カルピニでは *pilleolus*)に限られていることを考えると、ここでの「飾り *ornatus*」というのは、おそらくその頭飾りのことであろう。

38 かれらの住まいは宿営といわれ、^(a)円形であり、小枝と棒で出来ている。上の方に煙出しと採光のためにまるい窓がある。屋根と戸は、フェルトで出来ている。しかし住まいは大きさがまちまちであり、引き動かすこともできる。大きさに応じて、1頭の牛、あるいは3頭、あるいは4頭、あるいはもっと多くの牛さえ移動するために提供される。カンと有力者の宿営は、タルタル語で^(b)オルデアといわれている。かれらは集落はつくらず、それぞれのところで宿営ごとに管理されている。^(c)カラカロンという一つの都市があり、われわれの修道士が皇帝のシラ・オルダ、^(d)すなわち豪華な宮廷のそばにいたときは、そこから半日行程のところにあった。^(e)樹木が乏しいので、貴族も平民も牛・馬のふん以外に燃料というものが無い。

◇カルピニI章4・5節、II章6節

(42) 江上 1951；岡本 1952.

(a)「かれらの住まいは宿営といわれ」この句に始まる文のテキストは“Domus eorum stationes vocantur et sunt rotunde, facte de uirgis et de sudibus.”であり、とりあえず上記のように訳したが、意味内容は明らかでない。“stationes”はgerのような、なんらかの現地のことばに対する訳語だったのであろうか。ペインター氏は、“Their houses are called stations and are of round shape, made of withies and stakes.”と訳している。⁽⁴³⁾カルピニのこれに対応する箇所には「かれらの住まいは、円形で、テント風に建てられ、小枝と細い棒でできている。Stationes habent rotundas in modum tentorii preparatas, de virgis et baculis subtilibus factas.」(II章6節)とあって、わかりやすい。本38節では上記のほかに2か所および59節に“stationes”が見え、いずれにも同じ訳語「宿営」をあてた。なお、ブリディアにおいても、“stacio”は「住まい」の意味に使われており、以下の39・42・44・45・46・48節の“stacio”にはいずれも「住まい」の訳語をあてた。なお、当時のモンゴルの住まいに関しては、カルピニ(II章6節)のほか、ルブルクのII章にくわしい。

(b) オルデア ordea ordea は誤りで、カルピニに見える orda が正しい。orda は、君主・王侯の住まいを意味するトルコ語で、ordu ともいい、モンゴル語の ordu に対応する。『元朝秘史』では斡児朶、『元史』では斡耳朵、兀魯朶と表記されている。⁽⁴⁴⁾

グユクのオルドに関して、カルピニの方にブリディアには対応する箇所のない記述が見られる(IX章29～36節)。それによると、グユクのところには、オルドとしてとくに大型の天幕が3張りあった。一つは、見たところ2000人以上収容できると見られるほどの大きな白色の天幕で、カルピニがその中でカンの選任が行われたと観察したものであり、モンゴル人からシラ・オルド(シラはモンゴル語 šira で黄色の意)と称されていたという。もう一

(43) Painter 1965, p.86.

(44) Sinor 1970, p.546. オルドの史的研究としては、箭内 1920, 宇野 1988 がある。

つは、このシラオールドから3, 4リーグ(15キロ前後)離れたところにある天幕で、これを支える円柱は金箔でおおわれ、モンゴル人から黄金のオルダと呼ばれていたものである。カルピニらのような使節がグユクに謁見するときにはこの天幕が使われたという。さらにもう一つは見事な緋色の織物でできており、キタイ人から送られたものという。カルピニらはここでもてなしを受けた。以上の3種のほかに、后妃たちは白色のフェルト製の天幕をもっていた。

- (c) カラカロン Caracaron 写本テキストでは Cratura. カラコルム Qaraqorum のこと、中国文献には和林と記される。オゴデイ・ハン時代の1235年にオルホン河上流域に建設された都城。カルピニによると、一行はこの都城を実見していないという(I章4節)。この都城についてはルブルクが記録を残している⁽⁴⁵⁾(XXXII章1節)。

- (d) シラ・オルダ Syra Ordea シラ・オルダについては(a)に記したようにカルピニが記録を残しているが、その内部の様子についてはベネディクトゥスが次のように伝えている。「そしてシラ・オルダ、すなわち皇帝の住まいに導かれると、王冠をかぶり、見事な出で立ちで輝くばかりの皇帝を目にした。皇帝は天幕の中央にあって、金と銀でいくえにも飾られ、上方に天蓋のある壇の上に座っており、壇には4つの別々の階段がついていて、そこから上るようになっていた。3つの階段は壇の前方にあり、そのうち中央のものは皇帝だけが上り、残りの両脇の2つは高官とそれに次ぐ者が上り、壇の後ろにある4つ目の階段は母親と后と家族が上っていた」(*Relatio Fr. Benedicti Poloni* 10節)⁽⁴⁶⁾。またジュワイニーは、『世界征服者の歴史』の中でオゴデイ・ハンの住まいについて言及し、シラ・オルドについては「ハンは夏期にそこから山地へ出かけるが、そこには中国風の宮帳があり、その壁は格子状の棒

(45) 考古学的調査報告として Киселев 1965, 文献史料による研究として岩佐 1937 がある。

(46) Wyngaert 1929, pp.139-140.

で作られ、天井は金糸で刺繍を施した布地が張られ、全体が白いフェルトで覆われていた。この場所がシラ・オルド Sīra urdū と呼ばれている。」と記している。⁽⁴⁷⁾

- (e) 牛・馬のふん モンゴルでふんが燃料として利用されていることについて、文献資料と現地での聞き取りに基づいた吉田順一氏の専論に詳しい。⁽⁴⁸⁾

39 くある人たちの言い伝えによれば、チンギス・カンがかれらの創始者として現れたというが、修道士たちがかれらの間に長く留まっていたときには、祖先について詳しいことはほとんど分らなかった^(a)。しかしかれらは一つの神を、目に見えるものが見えないものの造物主として、この世における善良なものや邪悪なものに賦与者として信じている。しかしだからといって、神をそれにふさわしくは崇拝しておらず、雑多な偶像をも崇拝しているのである。かれらはフェルトで人間のかたちを作り、それを住まいの戸口の両側の、やはりフェルトで作った乳房のうえにおき、これは家畜の見張り人だと称してそれに乳と肉を供えている。しかも絹製の偶像を一層崇め、屋根つきの車にのせ、それを住まいの戸口の前に置いている。もしだれかがそこから何かを盗めば、すぐに死んでしまう。さらに千人長と百人長は、く干し草や藁をいっぱいつめた山羊の毛皮を^(b)住まいの中央においており、それにあらゆる種類の乳を供えている。ところでかれらが食べたり飲んだりするとき、はじめに動物の心臓を容器に入れて車の偶像に供え、翌朝それを下げて食べる。さらに初代チンギス・カンの像を作り、どのカンも住まいの前に置いて、供え物を捧げている。そこに供えられた馬にはもはやだれも乗らない。食べるために殺す動物も先ずそこに供え、その動物の骨は折らない。そのチンギス・カンの像には南面して神に対するように拝礼し、同じことを多くの者、とくに服従した貴族に強制する。

◇カルピニIII章2・3節

(47) Qazvini 1912, I, p.194; Boyle 1958, I, pp.238–239.

(48) 吉田 1982.

- (a)「ある人たちの言い伝えによれば、・・・全く分らなかった」 ペインター氏は、この一文を前節の末尾においていたが、オネルフォルス氏は、本節の冒頭に移した。祖先に関することであるから、いずれかといえば、住まいと燃料を紹介する38節の末尾より、神の礼拝のことをとりあげている本節の冒頭においた方が適当であると考えられるので、オネルフォルス氏に従った。
- (b) 山羊の毛皮 カルピニでは、千人長と百人長が住まいの中央においているのは、単に祭壇 *hyrcum* であり、山羊の毛皮を挙げていない。また、ルブルクは、モンゴル人の住まい内部の偶像の一種に、羊毛やその他のものを詰めた山羊の皮があったことを指摘している(II章7節)が、それが、本節でいう山羊の毛皮に対応するものと考えられる。ただしそれはモンゴル人の住まいの中における主婦の座におかれているもので、本節にあるように千人長と百人長という特定の階層に限られるようには記していない。

40 ところでかつて次のような事件がおきた。大ロシアの大公ミカエル^(a)は、かれらの支配に服したが、上記の像を拝礼することは、キリスト教徒のなすべきことではないといって拒否し、キリストの信仰を一貫して固守したため、[バトゥは]大公の右胸を心臓めがけて足蹴にするように命じた。かれの騎士が信仰を貫いて殉教するように励ましたが、大公はのどをナイフで切られ、励ました騎士は首を切り落とされた。なお、かれらは太陽・月・水・大地への供えものをする。これはとくに朝行う習慣になっている。

◇カルピニIII章4・5節

- (a) ミカエル Mikhail 生没年1185~1246、チェルニゴフ公(1224~1246) キエフ大公(1238~1239, 1241~1243)。バトゥがキエフの攻略に先立って服属をもとめる使節を派遣したとき、ミカエルは使節の殺害を命じて自らはハンガリーに避難した。のちキエフに戻ったが、1246年にバトゥのもとへ伺候に赴いた。そこでバトゥに謁見する前に火と火の間を通るという清めの儀礼と

偶像の拝礼を行うように求められたとき、宗教的理由からそれを拒否し、そのために処刑されたと伝えられ、ロシアの正教会からその「騎士」フェオドルとともに、殉教したとしてのちに聖人とされた⁽⁴⁹⁾。カルピニとブリディアでは、ミカエルが要求されたのは、偶像の拝礼だけになるが、ロシア側に伝えられているところでは火の間を通ることも要求されたという。これをミカエルが拒否したかどうかはともかく、のちの43節にあるように当時のモンゴルの習慣でこの要求は十分に考えられる。このミカエル処刑の事件については、ヴェルナツキー氏の説によると、ミカエルは当時ドニエステル河中流域のガリチ公ダニエルとライヴァル関係にあったが、バトゥは、両者のうちすでに優位に立っていたダニエルを手なずけてロシア西部における自らの支配を安定させようとしていたので、ダニエルへの贈り物としてそのライヴァルのミカエルの抹殺をはかった⁽⁵⁰⁾という。また、ハルペリン氏は近年の著作で、ミカエルがバトゥ側の要求に応じなかったことについて、バトゥ側には政治的な意味をもつものと受けとめられたであろうと見ている⁽⁵¹⁾。

41 さらにかれらには、チングス・カンからのある遺訓があり、かれらはそれを順守している。すなわちチングス・カンは、動物の内蔵中の汚物は、前^(a)に述べたように、臓器を切開して除去するのではなく、手で絞り出し、内蔵はこのようなにしてきれいにし、食べる用意をするようにと定めた。同じく、もし誰かがうぬぼれ、自らの権勢にものをいわせてカンになろうとしたならば、直ちに処刑するようにとした。そのため、グユク・カンの推挙のまゑに、チングス・カンの甥が^(b)帝位にありつこうとしたために殺された。同じく、世界のあらゆる地方を征服するように、ただ無条件で服属するのではない限り、誰とも和平しないようにと定めた。^(c)そして、あらゆる貴族は殺し、平民は助けるように命

(49) Дмитриев & Лихачев 1981, pp.228-235.

(50) Vernadsky 1953, pp.143-147.

(51) Halperin 1986, pp.47-53.

じた〉。さらにかれらにこう予言した。最後にはほとんどすべてのものがキリスト教徒の地方で殺されるであろうが、残った少数のものは、かれらの祖先が、さまざまな方法で殺されたその地方の法律を受け入れるであろうと。同じく、軍隊には十人長、百人長、千人長、万人長——〈一万人を指揮する者のことでロシア人は普通 tumbas と呼んでいる〉^(d)——[という命令伝達者]がいるべきであると定めた。

◇カルピニ V 章 17・18・19 節

(a) 動物の内蔵中の汚物 動物の内蔵に関する定めについて、ペインター氏は、リヤザノフスキー氏が紹介した、マクリーズィー所伝のチングス・ハンのいわゆるヤサの 1 つに、動物の屠り方を定めたもの（「動物を食べようとするときは、四肢を縛り、腹を開き、動物が死ぬまで手でその心臓をしめつけなければならない。そうしてからその肉を食べなければならない」）があるが、上記の一節はそれを誤り伝えたものではないかと推察している。⁽⁵²⁾ しかしカルピニ V 章 17 節によると、動物の内蔵に関する定めはチングス・ハンが中央アジア遠征の帰途にあって発したものであり、遠征中における食料難が背景にあってうまれたと考えるべきであろう。「前に述べたように」とは、第 16 節の記述（本訳・注(1)の 36-37 頁）を指している。

(b) チングス・カンの甥 実際には甥ではなく、弟テムゲ・オッチゲン Temüge-Ötčigin を指す。テムゲ・オッチギンは、オゴダイの死後、グユクの即位前に実力を行使してハン位を獲得しようと配下の軍隊を率いてオゴダイの後トレゲネ・ハトンのもとへ向かったが、結局失敗に終わった。グユクの即位後ただちにこの問題がとりあげられ、トルイの長子モンケとジョチの長子オルダが処理にあたることになり、審問を行った末、テムゲ・オッチギンを処刑した。⁽⁵³⁾

(52) Painter 1965, p.90, para.41, n.2.

(53) Boyle 1971, pp.178, 182.

- (c)「同じく、もし誰かが．．誰とも和平しないようにと定めた」「同じく」以下の、ハン位篡奪および世界征服に関する定めは、カルピニによれば、中央アジア遠征から帰国した後に制定されたものである（V章17節）。
- (d) *tumbas* 上記の一節に対応するカルピニには「その軍隊は、千人長・百人長・十人長・*tenebrae* [ラテン語、暗黒の意]、すなわち万人長のもとに組織されなければならないと [チンギス・カンは] 定めた」とある（V章19節）。この箇所⁽⁵⁴⁾に付した注で護雅夫氏は次のように説明した。モンゴル語で万を意味する *tümen* に対し、古代トルコ語にそれに似たことばとして *tuman* があり、雲、不明瞭、暗黒を意味する。カルピニが上記のように解説したのは、字形の似たこの2つのことばを混同した。そうでなければ、万と暗黒の両義のあるロシア語 *t'ma* を暗黒の意味にとったためであろう、と。カルピニが *tenebrae* と記しているのに対して本節ではなぜ *tumbas* となっているのか？問題になる。前者の通りであるべきものが後者のように記録されたのであろうか。そうだとすると、護氏の説明のように、上記のように似たことばや両義のあることばがあったところからモンゴル語 *tümen* (万) に対して誤解が生じたのであろう。

4 2 先祖からその恐ろしさが伝えられているので、次の行為は重い罪になるとかれらは主張している。1つは、ナイフを火に通したり、あるいはどんなやり方でも火に触れたりすることである。同じく、大鍋から肉をナイフで取り出すことである。同じく、火のそばで斧で木を割ることである。というのは、そうしている間に火のあたまが小さくなるとかれらは主張する。同じく、馬の鞭（拍車は使用しない）にもたれかかったり、あるいは鞭で矢を打ったり、あるいは幼鳥を〈巣から〉取り出したりすることである。同じく、手綱で馬を打つことである。同じく、住まいの中で小便をすることである。それをわざとやれば、

(54) 護 1965, p.100.

その場で殺される。もしわざとでなければ、金銭を呪術師に払わなければならない。呪術師は、その住まいと家財を、2つの火の間を通過させ、火によって清める。^(a)それが済むまでは、だれも住まいの中の家財にあえて手を触れない。同じく、一口のもの、〈あるいは意味は同じであるが、口一杯になるもの〉を口に入れながら、飲み込むことができずに吐き出したりすると、その人の住まいの下に穴が掘られ、その穴からその人は引っ張り出されてすぐに殺される。同じく、もし誰かが王侯の住まいの敷居を踏んだりすると、容赦なしに命を奪われる。〈それ故、われらの修道士たちは敷居を踏まないように注意された。^(b)同じく、家畜の乳をわざと地面にこぼすことは罪と見なされる。修道士たちが〉、人間の血を流すこと、〈酔っ払うこと〉、他人のものを盗むこと、〈その他この種のことも罪であるといっても、かれらは笑って全く気にとめなかった〉。というのは、かれらは聖人の永遠の生命や終わりのなき天罰があることを信じておらず、ただあの世で再び暮らし、家畜を増やして食べることばかり考えているからである。かれらは毒薬と呪術にも関心を払う。またその神をかれらはユガと^(c)いい、コマン人はコダルという。悪魔を通してもたらされる神の反応を信じている。〈あらゆる点でかれらの命令に服している限り〉、だれでも信仰の放棄を強いられることはないが、〈命令に服しないと、強引に強いられ、殺されたりする〉。それで、かれらはロシアのアンドレアス公^(d)——この人は偽りの裁判で殺された——の弟に対して、兄の寡婦を受け入れることを強い、2人をほかの人の面前で公然と同衾させた。

◇カルピニIII章5・6・7・8・9・10

- (a)「火によって清める」 北アジアの諸民族の間には、不浄と見なされているものを火によって清めをするという慣習がある。これについては、ハルヴァ氏⁽⁵⁵⁾が言及している。モンゴル人のその慣習については、主としてカルピニヤル

(55) ハルヴァ 1971, pp.211-212.

ブルクなどの歴史的文献により、ルー氏が火による浄化について論述し、また青木富太郎、鴛淵一の両氏も、それぞれ考察を行っている。⁽⁵⁶⁾なお使節に対する清めについては、次の43節に記されている。

(b)「敷居を踏まないように注意された」 カルピニでは、モンゴル人のタブーを紹介するなかでは、一行がこのことについて注意を受けたとはとくに記していないが(III章7節)、一行自身の体験を記した箇所では、コレンザのところでも、グユクのところでも、会見するときは、それぞれ敷居について注意を受けたことを記している(IX章11・33節)。

(c)「ユガといい、コマン人はコダルという」 カルピニの本節に対応する箇所に「その神を Utoga と称し、コマン人はこれを Kam と呼んでいる」とある(III章10節)。ユガ Iuga は、モンゴル語で地の女神を指す *etügen~itügen* のことであり、カルピニの記している Utoga の方がより原語に近いといえる。コダル Codar は、バインター氏によれば、ペルシア語の神 *khudāi* を写した Codai かその類いに由来するものであろうという。⁽⁵⁸⁾ちなみにアルタイ・タタールとキルギスでは、神々というときに、*kudai* を用いることがよくある。⁽⁵⁹⁾それに対してカルピニの Kam は、シャーマンのことであって神の意はないから、カルピニが誤解したのであろう。

(d) アンドレアス公 *dux Andreas* 生没?~1245 最後のチェルニゴフ公。カルカ河畔の戦いで倒れたキエフ大公・スモレンスク公ムステイスラフの子。カルピニの伝えるところでは、モンゴルの馬を領外に売却したことをとがめられて処刑され、そしてその弟と寡婦は所領の没収を免れようと請願にきたという(III章6節)。

(56) Roux 1984, pp.222-224.

(57) 青木 1952; 鴛淵 1952.

(58) Painter 1965, p.92, para.42, n.6.

(59) ハルヴァ 1971, p.128.

43 同じく、かれらには、何でも物事を、月齢の初めあるいは満月に始める習慣がある。^(a) 同じく、かれらは、月は大皇帝であるといひてひざまずいて拝礼する。一方、太陽は月の母であるといっている。それは、月が太陽から光を受けているからであり、くまた太陽は火の性質があるからである。そしてかれら自身何にもましてその性質を畏敬している。というのは、かれらは火によってすべてのものが清められると信じているからである。それだからかれらは、いかなる使節でも、持参してきた贈物とともに、たとえ毒物や害となるものが持ち込まれても清められるように、2つの火の間を通してからかれらの君主のまえに出さなければならない。そのために、われらの修道士もまた火の間を通過したのである。

◇カルピニIII章10節

- (a) 「月齢の初めあるいは満月に始める習慣がある」 同じような趣旨のことが『黒韃事略』にも「其れ日を擇びて事を行う。則ち月の盈虧を視て以て進止を爲す。朏の前、下弦の後は皆其の忌む所なり。新月を見れば必ず拜す。」と記されている。⁽⁶⁰⁾
- (b) 2つの火の間 カルピニは、IX章14節で、往路にあつてバトゥのオルドに入る前のことを次のように記している。「その宮廷に案内されることになると、火と火の間を通らなければならないと申し渡された。それは、私たちとしては何とか免れたいと思ったが、「安心して通れ。たとえお前たちが我らの主君にわるだくみを企んでいたり、あるいは何か毒物をもっていたりしても、火が悪いものをみな取り除いてくれるのだ。お前たちを火と火の間を通らせようとしているのは、ただそれだけのことだ」といわれたので、「こんなことで疑いをかけられたくないから、通り抜けよう」と答えた」。このような体験を踏まえて上記のように報じたのであろう。なお、外国の使節を火の間を通

(60) 王 1940B, 8a.

して清めることは、古くから北アジアの遊牧国家では見られたようで、568年ビザンツ皇帝ユスチニアヌス2世の使節ゼマルクスが突厥の宮廷を訪問した際に火による清めを受けている。⁽⁶¹⁾ またルブルクも、モンゴル人は外部から宮廷に送られてくるものは何でも火と火の間を通して清め、内輪の者でも死人の持ち物は同様に清めの対象にしたといい、そして1249年キプロス島滞在中のルイ9世からグユクのもとへ使節として派遣されたアンドレアス修道士の場合も、火と火の間を通過させられたが、それには贈り物を清める意味と、贈り物がすでに死んでいるグユクにあてられたもの故に清める意味とがあったと解説している(XXXV章3節)。なおルブルク自身は何も持っていなかったもので、火と火の間を通ることは要求されなかったという。

44 かれらの中で誰かが危篤になると、黒いフェルトでつつんだく9キュービットの^(a)棒をその住まいのまわりに立てる。そのときからは、よその人は誰もその住まいの境界のなかには立ち入ろうとはしない。さらに死の苦しみが始まると、ほとんど人はその傍らにとどまることはない。というのは死に立ち会った人は、第9の月^(b)が始まらないうちは、いかなる王侯や皇帝のオールドにも入ることはできないからである。

◇カルピニIII章11節

(a) キュービット cubitum 腕尺、古代の長さの単位で、指先から肘までの長さを指し、約43～53センチメートルに相当する。

(b) 第9の月 nona lunacio カルピニの方ではこれに対応することばは、新月 nova lunatio であるが、これでは期間が短すぎるように思う。ペインター氏はカルピニの nova は nona に訂正すべきであるといっているのは妥当である。⁽⁶²⁾ ちなみにルブルクは「大人の死に立ち会ったものは、1年の間マング・

(61) Yule 1915, p.208.

(62) Painter 1965, p.93, para.44, n.2.

カンの住まいに入れない。死んだものが子どもの場合には、その月が終わるまで入れない」と記している (VIII章3節)。

45 ところでもし^(a)富める人が亡くなると、その人を住まいに入れて、住まいごと肉を盛った盆、馬の乳の入ったカップとともにひそかに野原に葬る。その上、子のいる牝馬、手綱と鞍のある馬、〈矢筒と矢のついた弓も〉その人と一緒に副葬される。そして〈友人たちは〉1頭の馬を食し、その皮に干し草を一杯つめて木のうえに掲げる。^(b)亡くなった人が、搾乳用の牝馬、乗馬用の馬、その他、このようなものすべてをこれからさき必要とするとかれらは考えているのである。同じようにして金・銀も入れておく。

◇カルピニIII章12節

(a) 富める人 dives カルピニのテキストではこれに対応することばは、“de minoribus”(下層に属する)であり、語義の上で符合しない。しかしその“de minoribus”は、ペリオ氏の解釈に従うと、次節(III章13節)の冒頭にある“quosdam maiores”に対応するもので、後者が最上層に属する人であるのに対し、前者はそれよりは下層の人であるという。⁽⁶³⁾単なる下層民ではないことになる。ドーソン氏の訳本でも、このことばを“the less important men”と訳している。⁽⁶⁴⁾本節における「富める人」も、そのような階層のものであり、次の46節でとりあげる階層の方が上層であると理解すべきであろう。なお、カルピニの上記の箇所については、諸写本にうち1種のみ“de minoribus”ではなく“de maioribus”(上層の)とあり、メネスト氏はこれを採用している。⁽⁶⁵⁾この方が内容が理解しやすいからであろう。

(b)「1頭の馬を食し、その皮に干し草を一杯つめて木のうえに掲げる」馬の中

(63) Pelliot 1959, p.33; Pelliot 1973, p.27.

(64) Dawson 1980, p.12.

(65) Menestò 1989, p.241.

身をぬき、皮だけの馬をそのかたちが残るようにして頭から尻へ棒を通し、死者を埋葬した地面にたてるのである。この埋葬にかかわる風習は、カルピニとブリディアに伝えられているだけではなく、ルブルク(VIII章4節)、キラコス⁽⁶⁶⁾、イブン・パトゥータにも紹介されている。この風習の意義について、カルピニは、死者が来世で住まいと乳を得、馬を増やして乗馬をもてるようにするという考えに基づくと解説している(III章12節)。ボイル氏は、この風習を広い視野から考察し、結論としてTengri(天)に対する供えものという見方をとっている⁽⁶⁸⁾。なお同氏の論文には、後世のものであるが、地上にたてられた剥皮の馬の写真が収録されている⁽⁶⁹⁾。

46 さらに地位の高い人は、次のようにして葬る。野原に秘密の穴を掘り、くその口は四角くてかなり小さいが、内部は両側に広げられている。くもう1つの穴を住まいの近くに公然と目立つようにつくり、そこに亡くなった人を葬るようにみせかける。ところで、その人が生前に誰よりもお気に入りであった奴僕を、遺体の下にいれ、墓を開けておく。もしその奴僕が3たび遺体の下から息も絶え絶えになりながら立ち上がれば、かれは自由の身となり、全親族のなかで尊敬され、力をもつようになる。このあと墓を閉じ、くその場所の上へ夜中に牝馬あるいは牛を駆り立てる。それは、地面を平らにしてよそ者が副葬された宝物をみつけることができないようにするためである^(a)。時には、さらに以前に脇にどけておいた草を上におくことさえする。

◇カルピニIII章13節

(a) 地面を平らにして『黒韃事略』には「其の墓に塚無し。馬を以て踐蹂して平地の如からしむ」とあり⁽⁷⁰⁾、のちの元朝の葬制について『草木子』巻3下、雜制

(66) Boyle 1963, p.207.

(67) Gibb 1994, pp.908-909.

(68) Boyle 1965, pp.145-150.

(69) Boyle 1963, p.205.

(70) 王 1940B, 29b.

篇には「送りて其の直北園寢の地に至り深く之を埋む。則ち萬馬を用いて蹴平す。草青むを俟ちて方めて嚴を解く。則ち已に漫として平坡に同じ。復た遺跡を考誌する無し。豈復た發掘暴露するの患有らんや」とある。⁽⁷¹⁾ またバトウの埋葬に関連して『タバカーティ・ナースイリー』にも、「夜間その場所を覆い、その上に馬を駆って跡形もないようにする」と見えている。⁽⁷²⁾

47 なお、かれらの地方には2種の墓地^(a)がある。〈一つは平民のものであり〉、もう一つは皇帝と王侯と貴族のものである。もし何とか実行することができれば、ハンガリーで殺された者についてなされたように、どんな死亡場所からでもその墓地へ貴族の遺体を運んで来る。番人は別として、もし誰かがこの墓地に近づくと、さまざまなひどい扱いを受ける。だから、そのことを知らずに入り込んでしまったわれらの修道士も、もしくは大教皇——タルタル人は“yul boba”^(d)すなわち「大教皇」と呼ぶ——の使節でなかったら、厳しく処罰されたことであろう。

◇カルピニIII章14節

(a) 2種の墓地 本節とこれに対応するカルピニの記述とには齟齬が見られる。本節では墓地は上記の通り平民のものと皇帝・王侯・貴族のものと2種である。ただし平民のものについては全く説明がない。それに対して本節に対応するカルピニでは、墓地はやはり2種あると記されているが、それは「皇帝、王侯、あらゆる貴族が埋葬されているところ」と「ハンガリーで殺されたものが埋葬されているところ」である。「ハンガリーで云々」は、リッシュのようにハンガリーにある墓地とする見方もあるが、これは信じがたい。⁽⁷³⁾ やはりハンガリーから運んで来た遺体を埋葬した墓地であろう。ダフィナ氏は⁽⁷⁴⁾

(71) 葉子奇 1959, p.60.

(72) Less 1864, p.407; Raverty 1970, p.1173.

(73) Risch 1930, p.86.

(74) Painter 1965, p.94, para.47, n.1; Pelliot 1973, p.28.

その所在を南ロシアと推定している。⁽⁷⁵⁾そして一行が知らずに立ち入ってがめられたのもその種の墓地であるという。従ってカルピニによれば、いわばハンガリー戦死者専用の墓地があったかに思われる。一方、ブリディアでは、そのような墓地については触れられておらず、単にハンガリーのような遠方からも遺体の輸送を行ったことを語るにとどまっている。

(b)「貴族の遺体を運んで来る」戦さで倒れた者の遺体を持ち帰ることについては『黒韃事略』にも、「其れ従軍して死するや、其の屍を駝して歸る。否なれば則ち其の資橐を罄しくして之を瘞す。霰、見るに、其の軍中に死する者、若し奴婢能く自ら其の主の屍首を駝して歸れば則ち止だ給するに畜産を以てし、⁽⁷⁶⁾他人之を致せば則ち全て其の妻奴・畜産を有す。」とある。この記述によると、遺体を持ち帰るのは貴族的階層に限られていたわけではないようである。

(c) 番人 墓守りの存在については、『黒韃事略』に「忒没眞之墓の若きは則ち矢を插し以て垣と爲す。闊さ三十里を踰ゆ。騎を邏し以て衛と爲す」⁽⁷⁷⁾とあり、チンギス・ハンの墓に墓守がいたとする。またルブルクは、「かれらの祖であり君主であるチンギスの一族に属する者の場合、死者の墓のすぐ近くにいつも一軒の住まいを残す」「かれらの貴族を埋葬した場所の近傍にはいつも墓守りの小屋がある」と報じている(VIII章4節)。

(d) “yul boba” “boba”は教皇のこと。ただし、当時のモンゴル文では、教皇は“bab”⁽⁷⁸⁾と記されている。当時モンゴルにおいても「大教皇」という呼称が用いられていたので(ブリディアの2節、本訳・注(1)、前号p.19)、“yul”が「大」を意味することは間違いないであろう。ペインター氏は、“yul”をトルコ語の「大」⁽⁷⁹⁾を意味する“uluγ”にあてているが、サイナー氏によれば、不確かである

(75) Menestò 1989 (Note di Paolo Daffin), p.417.

(76) 王 1940B, 29b. ただし、王 1962, p.522 に従い、「馳」は「駝」と改めた。

(77) 王 1940B, 29b.

(78) Ligeti 1972, pp.243, 250.

(79) Painter 1965, p.94, para.47, n.3.

⁽⁸⁰⁾
という。

48 さらにある人がなくなると、その家に属する者はみな清めを受けなければならない。すなわち2箇所に火を用意し、その傍らに1本ずつ2本の棒を真っすぐに立て、その先端に紐を結んでわたし、その紐にはバックラム布の裂いたものを結び付ける。この紐の下を、^(a)[2箇所の]棒と火の間を、人と家畜と住まいは通過しなければならない。そして2人の女呪術師が[その傍らに]立ち、こちらからあちらから水をかけ、呪文を唱える。もし車が通過するときに、壊れたりあるいは何か他のものが落ちたりすると、女呪術師は彼女らの特権で直ちに自分のものにするのがきまりとなっている。同様に、もしだれかが雷にうたれて亡くなると、^(b)前述のようにして清めを受けるまでは、その人が持っていたものは何でも人から忌避される。

◇カルピニIII章15節

- (a) 棒と火の間 ルブルクも、当時のモンゴル人が死者の持ち物を火と火と間で清めるという習慣を紹介している(XXXV章3節)。またハルヴァ氏は、北アジア諸民族における、死者がでたときに遺族が行うさまざまな清めの習慣を紹介しているが、そのなかで上記の(またカルピニも伝える)清め方もとりあげ、2本の棒と2つの火は、死者が戻ってくるのをとどめることを目的と⁽⁸¹⁾していると解説している。
- (b)「雷にうたれて亡くなると」『世界征服者の歴史』によれば、ある人が雷にうたれると、その人の一族と住居は、部族から3か年のあいだ追い出され、⁽⁸²⁾かれらは王侯のオルドに入ることも許されないという。

(80) Sinor 1970, p.551.

(81) ハルヴァ 1971, p.264.

(82) Qazvini 1912, I, p.162; Boyle 1958, I, p.205.

49 かれらは、多くの妻を養える財力があれば、それだけ多くの妻を持つ。さらに一般的に、誰もが妻を買う。(だから貴族を除けば)、妻は財産のようなものである。そしてかれらは、母と娘と同母姉妹をのぞけば親疎をとわずめと^(a)る。父が死ぬと、継母をめとり、兄が死ぬと寡婦を弟あるいは一族のものがめ^(b)とる。女はあらゆる仕事を行い、すなわち靴や皮製の上着やその他のものを作り、男は矢だけを作り弓で射る練習をする。3、4歳の少年にさえ同じような練習を無理にさせる。ある女たち、とくに娘たちも矢を使い、一般に男と同じように馬にのる。もし人が姦通や不倫で捕らえられたならば、男も女も等しく殺される。

◇カルピニII章3節、IV章9・10・11節

(a)「母と娘と同母姉妹をのぞけば親疎をとわずめとる」 本節には、母・娘・同母姉妹以外は誰でもめとることができるように書かれており、またカルピニも「一般的にかれらは、あらゆる親族と結婚するが、母親・娘・同母姉妹は除外される。しかし、一人の父親から生まれた姉妹をめとることはでき、さらに、父の死後、父の妻をめとることができる。さらに、弟が、兄の死後に兄の妻をめとることができる。そうでなければ、べつの年下の親族がめとることになる。」(II章3節)と同様の内容を伝えている。しかし、当時のモンゴルの婚姻は、外婚制(exogamy)であり、ある範囲の父系親族との婚姻は禁止されていたと考えられている。⁽⁸³⁾ 一般モンゴル人がすべて外婚制であったかどうかは、史料から明らかにすることは困難であるが、少なくとも、チンギス・ハン一族の婚姻は、外婚制を遵守しており、アラン・コアを父系の祖先とする諸集団の間で婚姻は行われていない。近親婚が行われているように見えても、それはあくまで母方の親族との近親婚であり、父方の親族との間では婚姻は行われていない。従って、本節およびカルピニの記述は不正確なも

(83) ウラヂミルツォフ 1941, p.102; Bacon 1958, pp.59-60; 村上 1970, p.25, 注2; 福島 1985, pp.32, 40-44.

のである。おそらくハン一族の母方の親族との密接な近親婚をみて、本節のような理解をしてしまったものと思われる。

- (b) この婚姻は、人類学でいうレヴィレート婚(levirate)である。当時一般モンゴル人がどの程度レヴィレート婚を行っていたかを知ることは難しいが、チンギス・ハン一族については、多くの実例が見つかる。⁽⁸⁴⁾ 其中では、息子が実母以外の父の寡婦を娶るレヴィレート婚が多いが、兄の寡婦を弟が娶る場合もある。ここでは両方の実例を1つずつあげておきたい。まず、フレグはトルイの第1夫人ソルカクタニ・ベキから生まれた第5子であるが、『集史』に「(オン・ハンの息子の) アブクには1人の娘がおり、かの女の名をドクズ・ハトン Dūghūz khātūn といった。かの女をトルイのために娶ったが、彼の死後、フレグ・ハンがかの女を娶り、かの女はフレグの第1ハトンとなった。⁽⁸⁵⁾」「かの女は父のハトンであったのでほかのハトンたちより上であった。⁽⁸⁶⁾」とあるように、フレグはトルイの死後、トルイのハトンであったドクズ(ケレイト族出身)を娶り、自分の第1ハトンとした。これが父の寡婦を娶るレヴィレート婚の1例である。次に、兄の寡婦を娶った例をあげたい。フレグの次子ジウムクルは、フレグが西アジア遠征に向かったとき、モンゴル高原のユルトに残ったが、そのころジウムクルはオイラト族のブカ・テムルの娘ノルンを娶った。その後ジウムクルは、フレグを追ってノルンら家族とともにイランに移住することになるが、途中で死去し、ノルンは寡婦となってイランに到着した。先にイランに来ていたフレグの第4子テクシン⁽⁸⁷⁾は、『集史』に「ジウムクルの死後、かれはノルン・ハトンを娶っていた」とあるように、兄ジウムクルの寡婦ノルンを娶ったのである。これが兄の寡婦を娶るレヴィレート婚の1例である。また、死去した人物の息子や弟以外の

(84) 田中 1944, pp.20-23, 26-33; 小林 1954 (再録: 小林 1983, pp.111-112) 参照。

(85) Али-заде 1965, pp.271-272.

(86) Али-заде 1957, pp.6-7.

(87) Али-заде 1957, p.10.

一族が寡婦を娶る例としては、実現しなかったがソルカクタニ・ベキの再婚の例がある。オゴデイは、弟トルイの寡婦ソルカクタニ・ベキに、自分の長子グユクと再婚することを勧めた。しかしソルカクタニがこれを拒否し、実現しなかった。⁽⁸⁸⁾これは、トルイの甥にあたるグユクが、叔父トルイの寡婦を娶るという事例である。

50 かれらはその上他の民族以上に、さらにはまた聖職者がその高位聖職者に対する以上に、自分の主君に対して従順である。かれらのところでは、違犯者に同情の余地が認められないので、一層従順になりやすい。そのためかれらの皇帝は、かれらを全面的な権力のもとに掌握している。すなわち、死へであれ生へであれ送り込まれたときには、かれらはその命令を迅速に果さなければならないのである。皇帝は、自分が欲しいと思った娘や人妻や姉妹があれば、^(a)自分のために連れてきてしまうことさえできる。そして関係したあとで手元に置いておきたくなければ、気に入りの者にそれを与えてしまう。

◇カルビニIV章2節, V章22節

(a)「皇帝は、自分が欲しいと思った娘や人妻や姉妹があれば、自分のために連れてきてしまうことさえできる」 この実例としてよく知られているのは、オゴデイ・ハンの場合である。まず1つは、『元朝秘史』281節に、オゴデイ・ハンが自分の犯した4つの過ちを述べた部分があり、その第2番目として「次の過ちは、故なく、女人の言葉に従って、叔父オッチギンのウルの娘たちを連れて来させたという過ちであった。」とある。これを傍証する史料が他にないので、事実であるかどうかははっきりしない。もう1つは、『世界征服者の歴史』に出てくるオゴデイ・ハンに関する次の話である。やや特殊なケースであるが、本節の内容をある程度うらづける記事である。「千戸

(88) ドーソン 1968, p.287; 田中 1944, p.29.

のアミールであった。．．の部族で、この部族の娘たちをある集団に婚約させてしまうという命令がでたという噂が流れた。かれらはこの情報に恐れて娘たちの大部分を自分の部族の男と婚約させ、何人かを渡した。この話が、噂として広まり、王のもとへ達した。かれは若干のアミールたちを指名して、それを調査するためにそこへ向かわせた。事実が明らかになると、次のような命令が下った「年齢が7歳を越える娘は、みな集めるように。その年に夫に嫁いだ者は皆もとにもどすように」と。4千人の星のような娘たちを集めた。(中略)まず、アミールの娘は別にするようにと命じた。すべての出席者にかの女たちと交わるようにと命令を与えた。その中の2人の月のような娘が死んだ。残った純潔な者たちをオルドの前に列を作って立たせた。オルドに相応しい者は後宮に送った。何人かはチータや猛禽猛獣の飼育係に与え、何人かは宮廷の側近の1人1人に与えた。何人かは往来する人々の世話をするために居酒屋と使者の宿舎へ送った。[最後に]残っていた者たちは、命令が下されて、出席していたモンゴル人とムスリムたちに奪い取らせた。かの女たちの父親、兄弟、親戚、夫は傍観していたが、息をつき、ものを言う力も機会もなかった。⁽⁸⁹⁾」また時代は下るが、マルコ・ポーロも、フビライが Ungrat (オンギラト) と呼ばれる部族から多数の娘を連れてきていたことを伝えている。

51 使節には、皇帝が派遣したものであれ、かれのもとに派遣されてきたものであれ、無料で食糧と馱馬が支給される。けれども外国からの使節には、食糧はわずかしかが支給されない。すなわち2く、3く人でも食べつくしてしまうのに、それがく5く人に渡されるのである。くそれゆえに、われらの修道士がどれほど多くの、どのような辛苦を味わったかを記すことに私は戦慄をおぼえる。これに耐えた修道士自身も、人間の本性に逆らった状況で、イエス・キリスト

(89) Qazvini, I, pp.190-191. この話は『集史』オゴデイ・ハン紀にもほとんどそのまま引用されている。

の恩寵がいかにかれら自身を支えたかに驚いているのである。ああ、どれほど度々、パンも水もとらず、ただ昼か夜にあわただしく、きびを煮たごくうすいスープを飲んで辛うじて身を維持して、1日30ボヘミア・マイル^(a)以上をタルタル人の駅馬にのって進んだことか。馬がそんなに進んだといっても驚くにあたらない。というのは、馬が弱ると、かれらが休憩をとるより先に、タルタル人が別の元気な新しい馬を連れてくるからである。

◇カルピニV章23節、IX章19・21節

(a)「1日30ボヘミア・マイル以上」ペインター氏によれば、1ボヘミア・マイルは、約7キロ・メートル(あるいは4と8分の3モダン・イギリス・マイル)に当たる。従って、「30ボヘミア・マイル以上」とは、210キロ・メートル以上に当たり、1日の行程としては多すぎる。そのため、ペインター氏は、写本のこの部分は不鮮明であり、xxxではなく xv あるいは xx の可能性もあると指摘している⁽⁹⁰⁾。しかし、オネルフォルス氏があくまで xxx と読んで⁽⁹¹⁾いるので、ここはそれに従い「30ボヘミア・マイル以上」と訳しておく。

52 あらゆる住まいは、カンの命令に従って下営しくそして移動する。つまり、カン自身が王侯に場所を指定し、同じく王侯は千戸長に、千戸長は百戸長に、百戸長は十戸長にそれぞれ指定するのである。〈その上、貴族であれ平民であれ、皆まことにどん欲であり、極めつけの贈り物の強奪者である^(a)。すなわち、もしすぐに贈り物を貰えないと、食べ物をろくに出さなかったり、わざとぐずぐずしたりして使節を苦しめ、そうすることで、進んで贈り物を出さない者に対し、後で不本意ながらも贈り物を差し出さざるを得ないようにするのである。このため、われらの修道士は、善良な人々の施しを、それは教皇庁の神聖な命令と遣使を全うするために受け取ったものであるのに、大部分を贈り物

(90) Painter 1965, p.96, para.51, no.2.

(91) Önnersfors 1967, p.32.

に費やしてしまった。さもなければ、普遍的教会の仕事の面で、たびたび妨げられ軽んじられたであろう。

◇カルピニV章22節

- (a)「極めつけの贈り物の強奪者である」 具体的な例としては、往路にジョチ家の王侯コレンザに何度も贈り物を要求され、帰路にも要求されたこと(IX章10・47節)をカルピニが述べている。ルブルクの『旅行記』には、より詳細にモンゴル人から強引に贈り物を要求されたことが記されている(IX章1-3節, X章2-4節, XV章2・4節, XVI章1-3節など)。

53 また、かれらは他の民族の人々をひどく軽蔑する。だからタルタル人の通訳さえ、卑しい身分にもかかわらず、教皇庁の使節や特使であれ君主の使節であれ、自分に通訳を任された使節よりも、先に歩いたり座ったりするのである。また、かれらはよそ者に対して正義を守らない。というのは、かれらははじめは結構なことをたくさん約束するのであるが、最後には非道にも極端な残忍さを発揮するのである。すなわちかれらの約束は、さそりのようなもので、〈外見は魅惑的に見えるのであるが〉、突然くしっぽの有毒なとげで〉さすのである。

◇カルピニIV章4・5・6節

54 またかれらは、この世界のどの民族よりも酔っ払いである。というのは、飲み過ぎて胃の中のものを吐いてしまう毎に、その場ですぐにまた飲みはじめ、〈このことを1日に何回も繰り返すのがかれらの習慣だからである〉。その上、あらゆる種類の乳を飲むことを常としている。また、なんでもかんでもあらゆる汚いもの、狼・狐・犬・死肉・出産時の汚物・鼠を、そして必要なときには人の肉も口にする。^(a)〈同様に鳥の類も何ら拒むことはなく、清潔なものも汚いものともに食する〉。食事のときに手ふきも食卓かけも使用しない。だか

らひどく不潔な食事をする。碗はめったに洗わず、洗っても極めて雑である。
さじについても同じことがいえる。

◇カルピニIV章7・8節

(a)「なんでもかんでもあらゆる汚いもの、狼・狐・犬・死肉・出産時の汚物・鼠を、そして必要なときには人の肉も口にする」この部分はカルピニの対応する箇所の方が詳しく、「かれらの食べ物は食べられるものすべてである。というのは、犬、狼、狐、そして馬、そして必要であれば人の肉も食べる。」「さらに我々はかれらが鼠を食べるのを見ている」(IV章7節)と本節以外に馬をあげている。また「出産時の汚物」については、「牝馬から子供とともに出る出産時の汚物を食べる」(IV章7節)と述べており、おそらくこれは牝馬の胎盤である。これらの肉は、モンゴル人が普通に食べる羊、山羊、牛以外の肉としてあげられていると思われるが、かれらが食べる肉としてはかなり特殊である。当時は現在よりも狩猟によって肉を得ることが多かったが、食肉にした狩猟の対象としては、ルブルクが、短い尻尾をもつあらゆる種類のネズミ、ヤマネ (glis), ソグル (sogur) と呼ばれるマルモット (mar-mot) (=タルバガン), ネコのように長い尻尾をもち尻尾の先端に黒と白の毛のあるウサギ (=トビネズミ), ノウサギ (lepus), ガゼル (gazel) (=羚羊), 野生ロバ, アルカリ (arcali) (=野生羊) をあげており (V章1・2節⁽⁹²⁾), これらの肉の方が一般的であったと思われる。おそらく、本節とカルピニがあげている肉の種類は、食糧の不足した軍隊など、かなり困窮した状態で食べた肉の種類であろう。

55 けれども、かれらは自分たちの間では平和である。かれらの間では売春も姦通も極めて稀にしか見られない。かれらの女性は貞淑さの点では、他の民

(92) ルブルクが列挙した動物をどのような種と考えるかについては、吉田 1981, p.519 によった。

族の女を凌いでいる。ただしかの女らが、冗談のなかでたびたび淫らな言葉を口にするのは別である。かれらの間では盗みがないのが普通である。だから、かれらの住まいやあらゆる物に鍵をかけることがない。さらに、もし馬か牛かその類を見つけても、勝手に動きまわらせておくか、あるいはもとの持ち主へ連れ戻すかである。というのは地上のどんな民族よりも、馬・牝馬・牛・牝牛・羊が豊富にあるからである。かれらは互いにとても親切であり、互いに譲り与えることによって自分の持ち物を喜んで分け合う。しかもかれらはすこぶる忍耐強い。というのは、しばしば1日2日何も食べていなくても、十分食べているかのように歌ったり冗談を言ったりするからである。さらに、かれらは互いに他人の名誉を喜んで讃え合う。その上かれらの間では、めったにいさかいは起きない。〈上述のように違犯者は情状酌量されずに処罰されるから、かれらがそのようであったとしても、不思議ではない〉。

◇カルピニⅡ章7節、Ⅳ章2・3節

56 さてかれらの戦闘について、またいかにしてかれらを阻むことことができるかについて、簡単に記さなければならない。〈タルタル人がよその地方を襲おうと企てるときはいつでも、その地方を征服するために差し向けられる軍隊が、家族全員すなわち妻・子供・女召使、天幕、大型家畜・羊を含むあらゆる家財とともに、大量の武器・弓・矢筒・矢を自ら携行しつつ、非常に注意深く車や馬で急行する〉。タルタル人は[目的地に]接近しはじめると、迅速に進む先鋒隊を先行させ、不意に敵を驚かして滅ぼし、〈かれらに対して軍隊を急いで集結できないようにする。そしてもし障害がなければ、そのままずっと進軍し、その後ろに大勢の本隊が、自分の持ち物すべてを持って堂々と続く〉。

◇カルピニⅥ章1・11節、Ⅷ章1節

(a)「その地方を征服するために差し向けられる軍隊が」 モンゴル遠征軍の内容を具体的に簡潔に記した本節は、遠征軍の実態を理解する上で、貴重な史料

である。モンゴル軍が本隊に先行させて先鋒隊を派遣することについては、カルピニも記しているが、本節のように、モンゴル遠征軍の具体的な内容については記していない。遠征軍の内容について言及した史料としては、本節より簡略ではあるが、次の『蒙韃備録』の記事があり、モンゴル人が身分の上下にかかわらず遠征には妻と子を連れていくことが述べられており、本節の内容と一致する。「婦女 其の俗は、師を出すに、貴賤を以てせず、多く妻孥を帶び而して行く。自ら云うに、用うるに行李・衣服・錢物之類を管するを以てすと。其の婦女は、専ら氈帳を張立し、鞍馬・輜重・車駄等の物を收卸する事を管し、極めて能く馬を走らす。」⁽⁹³⁾

57 さらにもし勝てそうもない軍勢にぶつかると、直ちに自陣に退却し、軍隊を次のように配置する。^(a)〈中軍として大兵力を中央にある勝利の軍旗の周囲に置き〉、その両翼に2隊の小兵力を1隊ずつ配し、大兵力の前方に少し距離をおいて突き出す。そして若干の兵力を女・傷病者・子供・かれらの持ちものを守るために〔後方に〕残す。

◇カルピニVI章13・14節

(a)「軍隊を次のように配置する」モンゴル軍が遠征の時、遠征軍全体を3軍に分け、大規模な多面攻撃を行うことはよく知られており、例えば、チンギス・ハン時代の金国遠征では、左翼軍がジョチ・ハサル、テムゲ・オッチギンなど、中央軍がチンギス・ハンとトルイ、右翼軍がジョチ、チャガタイ、オゴダイであった。また、オゴダイ・ハン時代の金国遠征では、左翼軍がテムゲ・オッチギン、中央軍がオゴダイ、右翼軍がトルイであった。それに対して、本節の記事は、各軍が個々の戦闘の布陣においても、兵力を3つに分けて戦う戦法をとっていたことを述べている。

(93) 王 1940A, 17a-b.

58 こうして敵と衝突しそうになると、かれらのうち多数の者は、それぞれ矢筒と矢で身をかため、敵方の矢がかれらのところまで届かない距離から、自らの矢を射る。時には十分に射程距離に入っていない場合でさえ矢を射る。妨げられることなく矢で攻撃できるようになると、かれらの矢を射る密度が甚だしいため、矢を射るというよりも雨あられと降らせるようだといわれる。もし敵が油断しているのを見つけると、突然、敵を輪のなかに包囲し、ただ1つだけ逃げ道を開けておき、逃げてきた敵を激しく投げ槍で攻撃する。そうすると、包囲のなかで戦おうとしない者も、逃げ道で死ぬことになる。だから、下手に逃げようとしてきよろきよろするよりも思いっきり戦って死ぬ方がよいと私は思う。

◇カルピニVI章14節

59 くそのうえ注目すべきことは、もしかれらにとって[戦況が]有利であれば、前進するとき常に、背後には、千戸あるいは百戸のために、かれらにとって都合がよいように、人員と家畜をともなう宿営^(a)を設けることである。なお、[本隊から]近くにもうける宿営は、より強力で大きなものにする。

◇カルピニに対応箇所なし

(a)「背後には．．．人員と家畜をともなう宿営を設けることである」このように、本隊の後ろに設置された宿営は、モンゴル語で「アウルク 阿兀魯^{ᠠᠤᠷᠤᠯᠤᠬᠤ} a'uruq」(『元朝秘史』136・233節)と呼ばれ、『集史』では、aghrūq, ūghrūq およびその複数形で表記される。このアウルクは、ドーソン氏によって「これはモンゴル軍が遠征に出発するに際してかれらの家族や莫大な輜重を残しておく幕营地⁽⁹⁴⁾を呼ぶ語である」と解釈されてから、基本的にはこの説が継承されてきた。本節は、カルピニにはない記事であり、またこのようにアウルクについ

(94) ドーソン 1973, p.259.

て説明的に述べた記事はほかの史料中にはみあたらず、その点で貴重な記事である。本節に「千戸あるいは百戸のために」とあるが、千戸や百戸とは、軍隊の母体となる組織であるので、兵員の家族および補充用の兵員を意味するのではないと思われる。なお、フレグがモンゴル高原からバグダードまで進軍する間に、本隊の後ろの遠征路上の各地には点々とアウルクが置かれ、『集史』によれば、モンゴル高原のフレグのユルト、アルマリク周辺、ハマダーン周辺のジャキ草原、バグダード北東のハーニキーンにアウルクが置かれたことが明らかにされている。⁽⁹⁵⁾

60 くもしかれらが攻略した地方に、都市あるいは砦が残っていたならば、かれらに対して十分に抵抗することができる。そういう場所では、矢による応戦や投石器による発射が可能であり、また食糧と飲料あるいは木の供給を欠いても、包囲されている者は、強さと勇気で不利な状況でも持ちこたえることができる。古サクス人の地方でそのようなことが行われた。^(a)くたびたびかれらのうち少数の者が都市から出て行き、多数のタルタル人を殺した。女たちはタルタル人が放火した都市の消火に当たり、男たちは城壁を守った。しかも、地下の通路を通して都市の中心部に現れたタルタル人を殺し、残った者は駆逐したのである。人々は、夏や冬でも入ることのできる森であっても[かれらから]身を隠すことはできない。というのは、かれらは野獣を待ち伏せするように、人々を待ち伏せするからである。けれども、海とさきに言及した場所は安全である。

◇カルピニVII章10節，VIII章12節

(a) 古サクス人の地方 *terra antiquorum Saxorum* *antiquorum Saxorum* は属格形であり、主格形は *antiquus Sax* であるので、「古サクス人」と訳したが、後述す

(95) 蓮見 1985, pp.4-8.

るようにヴォルガ河下流の Saqsīn にあたると考えられている。写本には Saxatini とあるが、ベネディクトゥス *Relatio Fr. Benedicti Poloni* 6節の terra Saxorum, カルピニVII章10節の Saxi, civitatem Saxorum にあわせてペインター氏が訂正し、オネルフォルス氏もこれに従った。ペインター氏は、このように訂正する一方で、これがSaqsīnに当たるならば、写本の綴りは Sacas-⁽⁹⁶⁾sinorum の壊れた形かもしれないとしている。ところで、ベネディクトゥスは、*Relatio Fr. Benedicti Poloni* の6節において「さて、修道士たちがコマニアを横断しているとき、右手にサクスの土地 terra Saxorum があったが、我々はかれらをゴート人 Gothi だと信じている。この人々はキリスト教徒である。つぎにキリスト教徒のアラン人、そしてキリスト教徒のガザル人がいる。⁽⁹⁷⁾」と述べている。従って、ペインター氏が指摘するように、本節の「古サクスの antiquorum Saxorum」とは、古サクソン人 Saxones antiqui のことで、それは「ゴート人」と同じであるとベネディクトゥスは理解していたらしいが、その理解は誤りであり、これはヴォルガ河流域でブルガル族の南、⁽⁹⁸⁾ハザル族の北東にいた Saqsīn にあたると考えられる。この Saqsīn はイスラム文献にしばしば登場し、『世界征服者の歴史』『集史』では、以下に引用する例のように、必ずブルガルとセットになって出てくる。「年長の息子トシ Tūshī (=ジョチ)には、カヤリクとホラズムの地方からサクシン Saqsīn とブルガル Bulghār の辺境まで、その方面からタタルのウマの蹄が達するところ⁽⁹⁹⁾までをかれに与えた。」ペインター氏は Saqsīn を集団名ととっているが、ペリオ氏はイスラム文献に見られる用例を分析するにあたり、むしろ Saqsīn を都市名・地域名として扱っており、諸説を詳細に検討した上で、その位置⁽¹⁰⁰⁾をヴォルガ河下流、ブルガルより40日行程下った場所に比定した。

(96) Painter 1965, pp.99, 101, para.60, no.1; Önnerrfors 1967, p.36.

(97) Wyngaert 1929, p.137.

(98) Painter 1965, pp.100-101, para.60, no.1.

(99) Qazvini, I, p.31.

(100) Pelliot 1950, pp.165-74.

6 1 いかにしてタルタル人に対抗すべきかは、^(a)マカベア家の君主たちの様々な物語から十分に知ることができる。そこには、弓手隊を先行させたり、敵に対する伏兵をいろいろに配置したりすることが記述されている。のみならず、このことに関しては、司令官たちの仲のよさが絶対が必要であると私は思う。それは、[司令官たちが] 1つに集り、敵軍に対して3軍あるいはそれ以上の軍隊を、軍隊の質に応じて配置し、それ以外に、側面には最高の馬に乗った伏兵を配するためである。一方、^(b)弩隊は少なくとも3列にして軍隊の前に配置すべきである。かれらは、[こちらの側の軍隊が] タルタル人の戦列に達するより前に矢を放たなければならない。それは、われわれの戦列が逃げたり乱れたりしないように、うまくタイミングよく行わなければならない。もし敵が逃げはじめたら、弩隊は、弓手や待ち伏せしていた伏兵とともに敵を追跡し、本隊は後に続く。しかし、もし別働の弩隊がいない場合は、そのときは武装した馬に乗った兵士が前方に位置し、馬の額に結び付けた頑丈な盾の下に身を隠し、突然に現れてタルタル人の弓手を狼狽させる。その他、戦闘について補うべきことは、文献よりも経験的にそのような実戦の中で仕込まれた者たちに任せたい。

◇カルピニVIII章1節

(a) マカベア家 Machabei このユダヤ人の一族は、紀元前168年にシリア王アンティオコス4世エピファネスが、ユダヤ人に対する圧迫を強化し、エルサレム神殿を冒涇してユダヤ全国に偶像礼拝を強制したのに対して反乱を起こした。『旧約外典 Apocrypha』最後の「マカベア書」は、そのときのマカベア家の戦いぶりを記しており、ペインター氏によれば、「マカベア第1書」9: 11, 9: 38-40, 10: 79-82 に、この節が言及している記述がある。⁽¹⁰¹⁾

(b) 弩隊 Ballistarii ラテン語で弩(いしゆみ)のことを Ballista または Ballistarium といい、ここはその複数形であり、弩隊を意味する。カルピニは弩につ

(101) 馬場 1971, pp.294-295, 1271-1273 ; Painter 1965, pp.101, para.61, n.1.

いて「かれら(タルタル人)と戦いたいと思う者はだれでも次のような武器を持たなければならない。性能の良い強い弓、かれらが非常に恐れている弩、十分な数の矢、良鉄で作られた良いまさかりあるいは長い柄のついた戦斧。」(VIII章7節)と述べ、弩をモンゴル人が恐れている威力のある武器としてあげているが、本節のような弩を使った具体的な戦法にまでは言及していない。

6 2 くかくしてあなたの父なる方にお願ひする。もし整わずに書かれている箇所があつても、私の意図ではなく、むしろ私の無知に帰して下さるように。主の顕現より1247年7月30日目に仕上がる。^(a)タルタル人の生活と歴史は終わる。◇カルピニに対応箇所なし

- (a) ブリディアが本書を1247年7月30日に完成した経緯については、本訳・注(102)
(1)の「はじめに」(前号 pp.13-16)、およびペインター氏の解説を参照。

文献目録

A 史料

Али-заде, А. А.

1957 *Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джамии' ат-Таварих*, том 3, Ваку.

1965 *Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джамии' ат-Таварих*, том 1, часть 1, Москва.

1980 *Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джамии' ат-Таварих*, том 2, часть 1, Москва.

Dawson, Christopher

1955 *The Mongol Mission*. London: Sheed & Ward (Repr., AMS Press 1980).

(102) Painter 1965, pp.40-42.

Gibb, H.A.R.

- 1994 *The Travel of Ibn Battuta*, Vol.IV. (*Gibb Memorial Series*, New Series 178), London: The Hakluyt Society.

Lees, W.N.

- 1864 *The Tabaqāt-i Nāsri*. (Bibliotheca Indica), Calcutta (Repr., Osnabrück: Biblio Verlag 1981).

Ligeti, CLouis

- 1972 *Monuments Préclassiques*, 1, XIII^e et XVI^e siècles. Budapest: Akadémiai Kiadó.

Qazvini, Mirza Muhammad

- 1912 *The Tā'rīkh-i-Jahān-Gushā of 'Alā'u'd-Dīn 'Aṭā Malik-i-Juwaynī*, Part I. (*Gibb Memorial Series* vol.XVI, 1), Leyden: Brill (Repr., Bradford: Percy Lund Humphries 1952).

Raverty, Major H.G.

- 1881 *Ṭabaqāt-i Nāsirī: A General History of the Muhammadan Dynasties of Asia*, Vol.II. (Repr., New Delhi: Oriental Books Reprint Corp 1970).

Yule, Henry & Cordier, Henri

- 1915 *Cathay and the Way Thither*, Vol.I. London (影印, 北京, 文殿閣書莊, 1938).

王 國維

- 1940A 「蒙韃備錄箋證」『王國維遺書』第13冊, 北京, 商務印書館(復刻: 上海, 上海古籍書店, 1983).
1940B 「黑韃事略箋證」『王國維遺書』第13冊, 北京, 商務印書館(復刻: 上海, 上海古籍書店, 1983).
1962 「黑韃事略箋證」『蒙古史料四種』台北, 正中書局, pp.465-528.

村上 正二

- 1970 『モンゴル秘史』1, (東洋文庫 163) 東京, 平凡社.

葉 子奇

- 1959 「草木子」(元明史料筆記叢刊), 北京, 中華書局.

B 参考文献

Boyle, J.A.

- 1963 Kirakos of Ganjak on the Mongols, *Central Asiatic Journal* 8, pp.199-214.

Boyle, J.A.

- 1965 A Form of Horse Sacrifice Amongst the 13th- and 14th-Century Mongols, *Central Asiatic Journal* 10, pp.145-150.

Дмитриев, Л. А. & Лихачев, Д. С.

- 1981 *Памятники литературы Древней Руси: XIII век*. Москва: Художественная Литература.

Halperin, Charles J.

1986 *The Tatar Yoke*. Columbus (Ohio): Slavica Publishers, Inc.

Humphreys, R. Stephen

1977 *From Saladin to the Mongols: The Ayyubids of Damascus, 1193-1260*. New York: State University of New York Press.

Киселев, С. В.

1965 *Древнемонгольские Города*. Москва: Наука.

Pelliot, P.

1959 *Notes on Marco Polo*, I. Paris: Librairie Adrien-Maisonneuve.

1963 *Notes on Marco Polo*, II. Paris: Librairie Adrien-Maisonneuve.

de Rachewiltz, Igor

1990 Giovanni di Pian di Carpine, *Storia dei Mongoli*, a cura di P. Daffinà, C. Leonardi, M. C. Lungarotti, E. Menestò, L. Petech, Spoleto, Centro Italiano di Studi sull'Alto Medioevo, 1989, 522pp.+ 20 ill. *Rivista degli Studi Orientali* (Rome), 44.

Sofi Huri et al. (ed.)

1968 *New Redhouse Turkish-English Dictionary*. Istanbul: Redhouse Press.

Roux, Jean-Paul

1984 *La religion des Turcs et des Mongols*. Paris: Payot.

Vernadsky, George

1953 *The Mongols and Russia*. New Haven: Yale University Press.

青木 富太郎

1952 「蒙古人における火と爐」『高知大学学術研究報告』1-17, pp.1-18.

井谷 鋼造

1980 「モンゴル侵入後のルーム——兄弟間のスルタン位争いをめぐって」『東洋史研究』39-2, pp.110-139.

1989 「モンゴル軍のルーム侵攻について」『オリエント』31-2, pp.125-139.

岩佐 精一郎

1936 「元代の和林」和田清(編)『岩佐精一郎遺稿』, 東京, 岩佐伝一, pp.233-252.

岩村 忍

1941a 「元史速不臺伝の西征記事に就いて」『蒙古学報』2, pp.109-133.

1941b 「蒙古の欧州遠征」東京, 三省堂.

宇野 伸浩

1988 「モンゴル帝国のオルド」『東方学』76, pp.47-62.

Урагдилуццоф (Владимирцов, Б. Я.)

1941 「蒙古社会制度史」(改訂版) 外務省調査部訳, 東京, 生活社(復刻: 原書房, 1980).

江上 波夫

1938 「蒙古婦人の冠帽「順姑」に就きて」『人類学雑誌』53-6, pp.1-19. 再録: 江上 1951, pp.221-255.

- 1948 「北方エウラシア民族の葬礼に於ける髻面, 截耳, 剪髪について」『学芸』5-2, pp.9-15. 再録: 江上 1951, pp.144-157.
- 1951 『ユウラシア北方文化の研究』東京, 山川出版社.
- 岡本 敬二
- 1952 「アジア北方諸民族の婦人帽「李黒塔」」『史潮』46, pp.29-39.
- 鴛淵 一
- 1952 「初期蒙古族の火に関する風習」『人文研究 (大阪市立大学)』3-7, pp.7-23.
- 小林 高四郎
- 1954 「元代社会における「文化変容」小考」『社会労働研究』2, pp.38-50. 再録: 小林 1983, pp.101-117.
- 1983 『モンゴル史論考』東京, 雄山閣出版.
- 佐藤 次高
- 1986 『中世イスラム国家とアラブ社会——イクター制の研究——』東京, 山川出版社.
- 杉山 正明
- 1992 『大モンゴルの世界——陸と海の巨大帝国』(角川選書 227) 東京, 角川書店.
- 田中 克己
- 1944 「北アジアの諸民族に於けるレヴィレート」『北亜細亜学報』3, pp.11-48.
- 谷 憲
- 1984 「内陸アジアの傷身行為に関する一試論」『史学雑誌』93-6, pp.41-57.
- ドーソン (C. d'Ohsson)
- 1973 『モンゴル帝国史』4, (東洋文庫 235) 佐口透 (訳注), 東京, 平凡社.
- 蓮見 節
- 1985 「モンゴル軍の移動と a'uruq について (上)」『モンゴル研究』16, pp.2-19.
- 馬場嘉市 (編)
- 1971 『新聖書大辞典』東京, キリスト新聞社.
- ハルヴァ (Uno Harva)
- 1971 『シャマニズム アルタイ系諸民族の世界像』田中克彦 (訳) 東京, 三省堂.
- 福島 伸介
- 1985 「12-13世紀のモンゴル社会における uruq について——親族構造論としての外婚集団の分析——」『モンゴル研究』12, pp.31-47.
- 本田 實信
- 1967 「阿母河等処行尚書省考」『北方文化研究』2, pp.89-110. 再録: 本田 1991, pp.101-126.
- 1969 「イスラムとモンゴル」『岩波講座世界歴史』8, pp.253-293. 再録: 本田 1991, pp.197-232.
- 1991 『モンゴル時代史研究』東京, 東京大学出版会.
- 吉田 順一
- 1981 「モンゴル族の遊牧と狩猟」『東洋史研究』40-3, pp.102-137.
- 1982 「アルガルとホルゴル——モンゴル畜糞燃料考——」『史滴』3, pp.64-86.

[補注]

(1) 前号29頁の9節の注(b)で、チンギス・ハン時代の金の中都を攻めるモンゴル軍に飢饉がおきていたことが見える。その点についての注(b)では否定的なことを記した。ただし、オゴデイ時代のことであるが、1231年ころトルイの指揮するモンゴル軍が黄河中流域にあって金朝軍に立ち向かっていたとき、『集史』によると、モンゴル軍は「翌年のイスラム暦628年にあたる卯年には、軍の糧食が残っていなかった。かれらは非常にやせ細って飢饉に陥り、ひとの肉やあらゆる動物や枯れ草までも食するにいたった⁽¹⁰³⁾」という。実際にこのような事実があったとすると、モンゴル軍とても飢饉とは無縁であったわけではない。またそうした史実が時間的な前後関係を無視してチンギス・ハン時代の金朝を攻めるモンゴル軍に転移されたことも考えられる。

(2) 前号41-42頁注(a)において、チンギス・ハン時代にモンゴル軍が「犬の民」と戦って敗れたという話を記した史料の1つとして、アルメニア王ヘトゥムの旅行記をあげた。しかし、ヘトゥムの旅行記は、「犬の民」がカタイの彼方にいることを記すのみで、「犬の民」とモンゴル軍の戦いには言及していない(Boyle 1964, p.187)。従って、ヘトゥムの旅行記を、カルピニアブリディアの記事、『黒韃事略』と同列に挙げたのは不適当であった。

(3) 前号54頁注(i)において、カルピニがジョチの息子として記しているボラ Bora は、ジョチの第7子 Bo'al (Būvāl) に当たるとした。しかしすでにペリオ氏が、この Bora は『集史』ジョチ・ハン紀に「ジョチ・ハンの第11番目の息子アフマド。かれをボラ Būra とも呼んでいた」と記されている第11子アフマドに⁽¹⁰⁴⁾あたることを指摘しており、訂正したい。これについて赤坂恒明氏からご教示をいただいた。御礼申し上げる。⁽¹⁰⁵⁾

(103) Али-заде 1980, p.59; Boyle 1971, p.34.

(104) Rashid / TS 1518, fol.161b.

(105) Pelliot 1950, p.49.

[訂正]

前号 p.44, 「アレクダンダー」→「アレクサンダー」

p.53, 「20・21・25章」→「20・21・25節」

謝辞

本訳・注を作成するに当たって、聖アントニオ神学院の石井健吾氏にいろいろと貴重なご教示をいただいた。末筆ながらここに厚く御礼申し上げる。